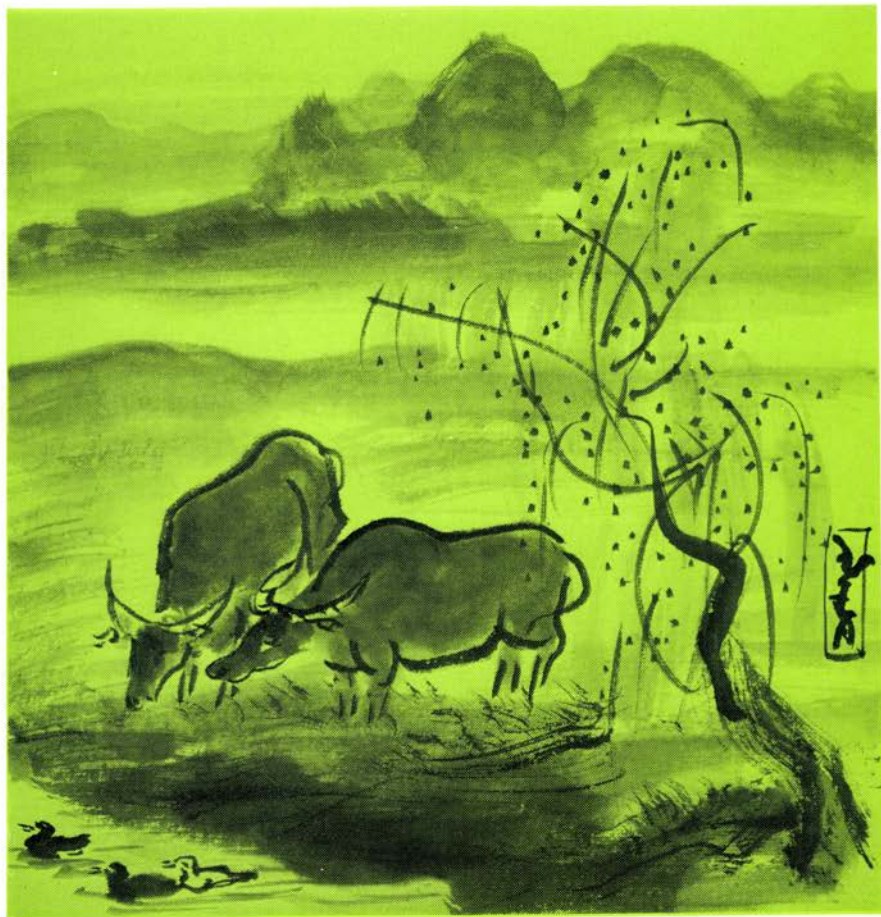


川柳塔

昭和四十一年一月九日 第二種郵便物認可
昭和五十四年二月二十五日印刷
昭和五十四年三月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷 六二二号



日川協加盟

No. 622

三月号

新緑・四国の旅

川柳塔本社親睦吟行会

日時 昭和54年5月18日(金)

大阪港21時40分発

(句会は道後温泉・青海楼19日14時)

兼 柳
題 話

会 費

二万五千円 (スケジュールは前号参照)

「四国方面の方のご出席をお待ち申します。」
「バスに人数制限がありますので至急申し込んでく
ださい。」(窓口・鬼遊・岳人)

主催 川柳塔社

〔愛〕	長	野	文	庫	選
〔香〕	三	井	醉	夢	選
〔高〕	月	原	宵	明	選
〔德〕	野	村	太	茂	選
〔林〕	橘	高	薫	風	選
〔嶺〕	菊	沢	小	松	選
〔坊ちゃん〕	川	村	好	郎	選
〔狸〕	西	尾	葉	選	選

あたたかいご家庭へ、あたたかいおみやげ



ぶ た ま ん や き ぎ ょ う ぞ
豚 饅 焼 餃 子
し ゅ う ま い ち ゃ あ し ゅ う ま ん
焼 売 ・ 叉 焼 饅

大 阪 ・ な ん ば



TEL (641) 0551

〔支店・出張店〕

なんば高島屋 心斎橋そごう 梅田阪神百貨店 天満橋松坂屋
中之島サン・ストア なんば新川店・新川売店 ドーゾマ地下支店
ミナミ地下虹のまち鹿鳴 京阪ショッピングモール 淀屋橋サン・ストア
近鉄百貨店 (アベノ店・上本町店・奈良店)

『母乳栄養』

良識という字があらうそ寒く

いさかいも笑顔も忘れ老夫婦

食いつなぐ暮らし肩を叩き合い

あきらめか悟りが錆び釘抜けぬまま

夢安かれ妻の餌の久しぶり

私は毎月正月五日間を読み残した本、買い求めてもそのままの本、ずっと以前に読んで興味の消えない本を読みふけて正月気分ひたる。ことしは、北浜喜一氏の「ふぐ」島崎敏樹氏の「生きる」とは何か」松村龍雄氏の「母乳主義」であった。「母乳主義」は小児科医は勿論、一般母親も母乳にまさる栄養はないと深く知識づけられて居て、今更にの感じさえ湧く程である。それが近來いろいろ言挙げされて来るのはなぜか。例えば朝日新聞関係から「母乳で育てましょう」とカセットテープが出たり、松村教授はネオ母乳主義を提唱し、少くとも新生児に粉ミルクを与える事は慎重にと言われる。なぜか。私は思う。若い母親の生活態度と、粉ミルクが進歩改善されたためである。このままでは、今にミルク栄養が母乳栄養にとって代る危懼がはつきり見えるのである。川柳の世界にも柄井川柳に還れとの主張を聞くが、少くとも新生児の間には、柄井川柳の母乳が、是非必要ではないだろうか。

中島生々庵

~~~~~

川柳塔三月号



座右の句

人間が人間の道行くむつかしき

(一 栄)

私の句

頼まれた葉書一日持ち歩き

宮本茂児

## 川柳塔 三月号 目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

母乳 栄養

中島生々庵 (1)

78年世相川柳考

本多 柳志 (2)

俳風柳多留廿五篇研究

(二十三)

(26)

清 博美・八木敬一・紀内恒久・青木迷朗・西原 亮  
鈴木 黄・室山三柳・入江 勇・岡田 甫

川柳塔 (同人作品)

西尾 栞選 (4)

水煙抄

正本 水客選 (30)

江戸気質雑俳往来 (川柳太平記<sup>⑩</sup>)

東野 大八 (24)

秀句鑑賞

(同人吟)

渡辺 暁童 (28)

愛染帖

(水煙抄)

三井 醉夢 (29)

柳話から

橘高薫風選 (42)  
中島生々庵 (41)

## 78年世相川柳考

本多 柳志

い 医者にする学費は親のさじ加減  
ろ ローン取立てきびし子供のいのちまで  
は バングラに負けて日本の株が落ち  
に ニュースにもならぬ四つ子が又生まれ  
ほ 豊作へすまなそうに立つかし  
へ 北京からのニュースソ連を慌てさせ  
と 鄧小平へ当てが外れた社会党  
ち 父の日の父の出て行く作業服  
り 流行語あんたが主役なんちゃって  
ぬ 盗まれた謎を秘めてる貸金庫  
る 流浪三年むつは佐世保へ流れつき  
お オーナーも江川一人をもて余まし  
わ わかるかなわかんねえかとピカソ展  
か カラオケバー古賀先生は生きてはる  
よ 予想した八百本へ手を叩き  
た 脱サラもようせぬ肩を叩かれる  
れ 歴史書を又読み返す修羅出土  
そ 総裁選現なまもとびデマもとび  
つ 強すぎて又弱すぎる高見山  
ね ねずみ算人にすすめて罪になり



|              |             |      |
|--------------|-------------|------|
| 一年をふり返り      | 西尾 栞        | (51) |
| 玉青先生の襖絵見学    | 正 本 水 客     | (40) |
| 近江砂人さんを悼む    | 阿 萬 萬 的     | (46) |
| 初歩教室         | 橋 高 薰 風     | (45) |
| 大萬川柳「これから」   | 本 田 恵 二 朗   | (50) |
| 柳界展望         | 川 村 好 郎 選   | (52) |
| 本社二月句会       | (廣 佑・整理)    | (55) |
| 各地柳壇(佳句地10選) | 小 林 由 多 香 選 | (59) |
| 「攤 段」        | 高 橋 幸 代 選   | (48) |
| 一路集「陽光」      | 川 端 柳 子 選   | (48) |
| 「女」          | 太 田 良 子 選   | (49) |
| 編集後記         | (三 夫・葉 子)   | (65) |

座右の句

塩壺の塩の白さへ心足る

(茗 人)

私の句

忘れたいページは閉じたままにする 渡 辺 独 歩

な なんのその北極点へハタを立て  
ら 落語家もまとめ話は下手と見え  
む 無罪への道はけわしいロッキード  
う 疑わしきは買わず伊勢えび売れ残り  
の のうとドンは巨宅のふところ手  
く 勲章の重さ年々軽くなり  
や やくさまで記者会見へ胸を張り  
ま マグナ7都市よあなたは弱かった  
け 権力も金には勝てずイスを降り  
ふ 福田派の将棋は角を追いまわし  
こ 公約にあつて予算にない政治  
え NHKが何さとピンク見栄を切り  
て デザートに毒消しも要る披露宴  
あ 兄弟子に太刀をもたせた晴れ姿  
さ サミットへ出る幕もなく年が暮れ  
き 気に入らにや読むな新聞二千円  
ゆ 有事論のらりくらりと国平和  
め 迷宮にかくれたらしいコレラ菌  
み 南座の親子三代成駒家  
し 親らんも来世の僧は度し難し  
ひ 非行記事ベンが重たい編集部  
も もの云えば首筋寒し自衛官  
せ 生徒にも教師にも要る修身科  
す 翠扇が往つて新派に穴が明き



西尾 葉選

八尾市 納糸葉

めでたさも只一膳の雑煮箸  
走っても走っても良心ついて来る  
ゆきずりの風に心を盗まれる  
憎しみはすでに流れて三回忌

五線符に哀しい女多すぎて  
影法師お前も胸をはるんだよ

青森市 工藤甲吉

権力は時に東を西にする  
日本の味をうとんじパンを食い  
貧乏へ冬はあまりにまとも過ぎ  
母子像はあわれ一と冬雪の中

一月九日

妻の忌をポコポコポコと鳴る木魚

大阪市 金井文秋

虚勢など張るから人間小さく見え

恥捨てるのに肩書が邪魔をする  
ママ安堵隣りの子には負けてない  
尽すのが嬉しい幸せな女  
女だてらにと女の目が厳し

富田林市 岩田美代

白い衿私に夢があった筈  
ジャンケンポン新春から運は逃げていた  
甘言に酔えぬ女の坐りだこ  
倅せな事に今日ふたり共おとな  
艶話持たぬ男の冬帽子

倉敷市 野田素身郎

酒ばかりではない師走の胃の痛み  
吊し柿里の香りの粉をふき  
欠席した奴が肴にされる酒  
課長補佐己れを殺すだけ殺し  
忙中の閑へ虫歯が痛みだし

倉敷市 田垣方大

街で会う看護婦さんをお見それる

息とめて一分間の長いこと

精神論だけでは社長つとまらず

単調な雨だれやけど心打つ

いそいでる春せせらぎに見つたり

倉敷市 水粉千翁

新年へはしゃぐ老いの楽しさよ

われも又渚の波と迷うなり

ふりかえるものなし道は遥かなり

踏みしめて見上げる空の青さかな

師の影を踏まず自鞭を持ち直す

松原市 谷垣史好

暖冬が続くとみんなお人好し

春になると文房具屋になりたくて

さわやかな朝に納豆など食えぬ

一輪挿しの花がいちばん生意気な

応接間で流す涙は空涙

米子市 八木千代

執拗にある日のテープ巻き戻す

天運を願う字画の指を折り

傘をさす角度も計算してスター

頭では許して胸がおさまらず

埋立の底からひびく波の私語

大阪市 本多柳志

元日に咲かせる鉢へ水をやり

羊頭も狗肉も走る選挙カー

親鸞も来世の僧の度し難し

弔電の束から選挙匂うて来

義母の死

浄土への道は遠かる般若経

川西市 戸田古方

靴をすべらせ靴に丸葉つぶされる

よう生きたもんやと思うお元日

罰あたりのままで今年も暮れました

いのちあずけますと軽うなってくる

正月四日今日はええのん着ていこう

東大阪市 市場没食子

自己主義の視野より出ない酷批評

メトロの世変る大阪町名史

境内の落葉奉仕の焼く煙り

金婚へ後一年の顔の艶

昭生君結婚

大空へ羽ばたけ二人腕組んで

八尾市 高杉鬼遊

夫婦仲背中を抜ける風が知り

さよならの文字おそろしき妻のメモ

ズームレンズ女へ向ける高さなり

年金で軽いのちを温める

落ちこぼれそれでも三度めしを食い



大阪府 小出智子

男のように偉くはないがよく動く  
あさはかなことだと籠の鳥が言う

いつまでの女と思う春の傘

小走りの後ろ姿を冬が追う

一周忌をすますと春が近くなる

大阪府 河野君子

限界線そんな想いの年明け

元旦や生年月日を殊更に

青春のピラニアおせち忽ちに

割烹着の安らぎ業を包むかに

さまよえる羊となっていた賀状

鳥取市 河村日満

喉に餅詰めて死ぬるも十二月

さかずきも自重自重の老いの新春

孫揃う狂騒曲の中の新春

孫抱いて新春の炬燵へ雑魚寝する

年玉の数年金をおびやかす

竹原市 小島蘭幸

まっすぐな道が続いている二十才

朝の風呂いざ出陣の日の男

少し考えると眠くなる男

やがて父親になるポケットのあたたかさ

制服の男四五人寂と飲む

米子市 小西雄々

遺書を有難くきく涙声

雪あけは誰がしたのか無人駅

パトロンを変えても景気よくならず

宮仕え勇氣忘れたわけでなし

番台をしても良いよな歳になり

尼崎市 黒川紫香

天の声まだまだ君の席はない

Uターンすると都会は動き出し

寒蟬よ動くな外は吹雪だよ

正座して次の言葉をじっと待つ

なんの薬やと覗きこんで云う

高槻市 若柳潮花

ふるさとはもう夢のないアスハルト

小走りでジャンジャン横丁通り抜け

約束があるのか鳩も屋根で待ち

都鳥なぞと鷗も粋なこと

裾ひいて綺麗な嘘をつく妓

泉佐野市 阿萬萬的

足跡トボトボトボトボ雪の操車場

植林の杉を絵にして雪が降る

ところどころに落丁がある日本史

京に背を向けた御陵にある哀話

飛鳥路は小雪喋らぬ石ばかり

今治市 長野文庫

またいやな正月と言ひ叱られる

酔った日に安請合いをしてしまい  
虚を衝いて運のよい歩が金になり

小細工の必要もない歳となり

走者一掃のホームランでも追っつかず

和歌山市 野村 太茂津

じっと手を見ることもなく前ばかり

高齢化前頭葉はこき使え

手助けはせぬが誤ちだけは責め

かなしいことに受身ばかりを言う女

オイッ行こうそれで和歌山気が揃い

竹原市 山内 静水

さまよえる羊に恐い有事論

いじ悪な祝電に湧く拍手

日向ぼこ祖母美しく老い給い

糸ピンと鳴らせボタンつけてくれ

鍵すてた日から心の鈴が鳴る

倉吉市 奥谷 弘朗

偽物の相場も知っているマニア

馬鹿笑いして弱点に触れさせず

行き届く言葉にふれるあたたかさ

傘貸してくれたマダムの下心

わがままへじっと我慢の妻を持ち

八尾市 香川 酔々

能面の笑いは屠蘇に酔うている

格子戸の奥に広がる絵巻物

月光が止まる弥勒の指の先  
潮騒に目覚め地酒の酔い残る  
春は曙まず牛乳屋・新聞屋

島根県 小砂 白汀

編み込んで見ようか見捨てたさくら貝

摺り切れる予告を光る膝がしら

嬉しくて流す涙だ隠すまじ

信号機ごときに人間指図され

捻じ曲がる何が不足で藤かずら

松江市 小林 孤呂二

父と子の隔たりはなし松の内

滅私奉公はつんぼ座敷に置かれてる

おもしろがられて末っ子伸びざかり

口笛は挫けていないなと思ひ

熱中時代それも過去なり懐しむ

神戸市 中村 ゆきを

天使とは誰も気づかぬ知恵おくれ

飲んで癒すよと初春から竹を踏み

初春の海展望台でむくみかん

ちびちびと賀状いだだくのも目出た

空席へおぼはん二人飛んでくる

桜井市 岩本 雀踊子

輪の外に妻と云う名でいる他人

棘のある花がきれいに咲きほこり

一本の矢は最後に残していた女

雨シト女を泣かす音になり  
片目だけ開いた男の無駄話

兵庫 遠山 可住

十人十色、三人三様流れ雲

大みそかあしたは笑う嘘がある

精神一統神経痛に耐え

お見事な腕ににせもの掴まされ

お人好し曾父―父―僕と一筋に

藤井寺市 児島 与呂志

悼む加納楽々君（一句）

善人が約束したままそのまんま

気がかりな嘘はやっぱりつけなんだ

ときざむ音が深夜を寒くする

靴の音高く女の春にする

春近い匂いの風が川走る

新宮市 大矢 十郎

つめ切ってくれた女も孫を連れ

馬鹿の方がブリキ鉢より素直

それぞれに厳しい過去を持つ飯場

汗をかく程貫ろていず積降ろし

遠縁が帰り封切るナポレオン

平田市 久家 代仕男

身を捨てて浮ぶ瀬のない十二月

姿見の母へ障子がよく似合う

グレープフルーツ爽やかでない売値

悔み所で立つ茶柱は沙汰もせず  
ちぎり絵の色も佗しき冬景色

大阪市 中川 滋雀

三三五五遅れ賀状に松が明け

受験生もすなおに祈る掌の凍え

つまずいた石のことばを拾いあげ

木枯のリズムにみかんをむく夫婦

年寄りの愚痴日溜りに落ちている

島根県 堀江 正朗

手にいつも汗して握る白い杖

欲がまだ箸の動きにたくましい

手に触れて分っただけの欲で生き

手さぐりで従いてゆけない音の数

嘘ひとつ言えぬきこちな年重ね

竹原市 森井 菁居

春の唄だけしか知らぬ桜草

エリート視界にはない廻り径

寒木瓜の朱に弱虫を嗤われる

札束で買えない父の平手打ち

すんなりと決まるも遊ぶスケジュール

今治市 越智 一水

臨月も妻休まずにミシンふみ

妻病んで米磨ぐ夜へ月のぼる

百姓の暮らし迷える羊似て

みかん三代半農半漁あがくだけ

元日も妻弁当をいれてくれ

岡山県 出原 敬一

美人の口から出た言葉の平手打ち

こんなにやくが好きな老婆に灸の跡

新年の目覚めも同じ床の位置

放蕩の旧知に似たり冬の蠅

やりくりも楽し帰化人の壺に惚れ

大阪府 川口 弘生

未歳の女の幸を祈る初春

食べる草えらぶ権利をもつ羊

負うた子がルール違反を許さない

恋すすむもう計算のない二人

鬼の首取って置き場に困る破目

八尾市 大 路 美 幸

未来図を妻と話せば金のこと

灯をともし子に将来を賭けている

もう十年ようし多忙を買ってやろ

決意した男を叩け神仏

数字追う一日なりし小商人

八尾市 高 橋 夕 花

まっ白なぬくいご飯は母の愛

美味いものおいしく食べる家族の灯

昔ばなしに愛の戦が一つある

一月二日しずかに廻す洗濯機

土鈴鳴る堪える女の胸深く

アーウーで位人臣を極め

紅茶にウイスキー少し落としてペン走る

父の靴娘のブーツに見下ろされ

一生を紙の花輪で讃えられ

酒の宴ソロソロ顔を出す本音

富田林市 和 田 維久子

過去語る思いがけないペンと会う

文字にする理想インキが漏れている

奥の手は使わずかわす白い石

合の手の一つが変えた浮き沈み

寒げいこ炬燵の中で子を案じ

松原市 玉 置 重 人

元旦の勤務が寒い改札機

儲っていますカルテに書いてない

賽銭がニュースに写る戎さん

不況追放吉兆の値が上り

定年譜足跡が無し風の音

八尾市 宮 西 弥 生

共稼ぎ大黒柱は抜いてある

筋のないつとめの指に光る石

寒椿静かに燃えている奢り

逆転を待つ刻千金なら買おう

女同士一線守らねばならぬ

大阪府 江 城 修 史



子が走るレールへ未来図を乗せる

ふり返る過去に故郷の空がある

負け犬が話せば嘘になる話

地に還る枯葉に本音などはない

さわやかに老いたし理由などいらぬ

神戸市

仲

どんたく

除夜の鐘テレビは下駄の音を入れ

ボス猿の瞑想してる雪の山

もう近い齡と和尚の愛想良し

季節感冬の苺が造反す

生れますさかいに毛糸編む車中

鳥取県

川

崎

秋

女

小刻みに来る年賀状にある怒り

磨かれて只の石にもある光り

親姉妹ないのもいっそ身軽うて

野心なぞないが負けぬ気だけはもち

鶴の一声明治まだまだ生きていた

鳥根県

梅

みどり

蝶よ花かくも大事な娘と別れ(二女を嫁がせて)

晴れの日の涙はなぜか限りなく

花嫁の背にすがりたい掌をにぎる

そそとして新妻らしい旅帰り

灯明がゆれて心にうつる影

和歌山市

西

山

幸

いっさいを無にする炎抱いている

差を意識した握手から冷えてくる

胸のうち書けば喜劇になりそうで

負けた日の蹴る石もない帰り道

大阪市

津

守

柳

伸

ええ格好してから酔いがさめ始め

元日も一人住いに寒い朝

仏壇とまた話してるのに気付き

独りには見られたくない彩を選び

淡雪の恋に終止符などいらず

出雲市

原

独

仙

ここまでを生きた五体を湯に温め

喜寿を得て米寿白寿へ欲が湧く

初詣願いは息災安楽死

国内で儲け外遊して果たし

いたずらの投書へ相談欄真面目

西宮市

藤

村

女

戸を開ける音にもそれぞれ長女次女

傷口へひたひたとくる鐘の音

合槌は打ち同情に遠い顔

絵のような女が通る小糠雨

わかめ干す女に春陽まぶしすぎ

和歌山市

桑

原

道

夫

病院の廊下のこも行止り

ブーメランが戻ってこない交差点

男二人しゃがんで何もおそれない  
自転車置場の風より乾いたものはなし  
車内放送景色を見ると景色なり

鳥取県 鈴木 村飄子

肩書のない名刺でも持ってみろ  
凡夫凡婦それでも金婚式だとさ  
法律の外の殺意は誰も持ち  
菜の花に十九の春の過去もあり  
麦みどりふたりしあわせ意識せず

堺市 高橋 千万子

アルバイトから未来図をぬりかえる  
ひと先ずは意地で断り義理で発つ  
手ぶらでも大きな話題さげて来る  
残り火のくすぶるままに逢えぬ人  
自白して女は渦の外にいる

八尾市 内海 幸生

模索して寝るより他はないと知る  
頂上でゆっくり外す鬼の面  
三面鏡僕に逆らう面一つ  
紺がすり大島紬を生んでゆく  
三猿をきめれば仏の面くれる

鳥取市 両川 洋々

辞退しているのに勲章くれたがり  
女とことん泣く気つけマツゲを外す  
奥さんの不倫をコンパクトが叱る

お歳暮へああ真心は入れ忘れ  
どうやりくりつけたか飲む金だけは持つ

寝屋川市 柴田 恵美子

締切へ決定版が出ぬ焦り  
のっけから国王お逃げになるニュース  
暖冬ぐらいで展望曇らせぬ  
生姜湯孤独な胸を撫でてくれ  
スランプとおこがましいが云う外は

富田林市 板尾 岳人

安万侶の噂を知っている樹水  
白い国少し遅れて雪となる  
雪女母になる日に雪となる  
冬景色未婚の母を許さない  
山の絵に少し疲れ色がある

大阪市 大坂 形水

知事官舎の近くに住んで知事最良  
イデオロギー抜きの一票持っている  
金儲けだけの商売ならやめる

友人U君急逝

一月号が終刊号となる悲報  
君にしか出来ぬ仕事を残し逝く

大阪市 不二田 一三夫

狎銃魔この日の神も共犯者  
怒ること忘れたペンなら持っている  
パーフェクト赤エンピツに折り込め  
いつかは活字に殺されるだろう

アメリカ県ニッポン村に住みなれる

藤井寺市

西

いわを

鍛えてる酒だ病後もおもむろに  
犯罪の裏犯罪を絡ませる

俯いてまた仰むいて見る読書

古風趣味さて古屏風どうしよう

宝塚市

傍島静馬

ふと合うた視線にあくび殺される

うまいこと書けた手紙に嘘がある

下書のほうが筆勢冴えている

母の味料理の本にも書いてない

西宮市

島居百酒

縁談を頼みに久し振りの顔

賀状書き喪中が増えた気の滅入り

歳末の買出し俺の役となり

掃いたのを哪喩うように枯落葉

愛媛県

渡辺曉童

悪がたまりも 既に古稀すぎ

花咲かすには 程遠き雨

酒は毒より 効き目速効

陣笠いわく はきだめの鶴

今治市

月原宵明

激情を押えて冬的大海黒し

ゼンマイの切れた玩具に似た夫婦

義齒とれば正しく生きた仏さま

朝寝して嫁が欲しいと言わず

岡山県

直原七面山

道順は足が知ってる梯子酒  
七人の敵へ七つの矢を番え

またキッスの歌か年寄向でなし

射程距離に彼女をおいて吸う煙草

岡山県

嘉数千代香

更生をしたなと思う靴の音

汚染魚は語らず肚を上に向け

歩くしかすべない駄馬として歩く

仏にも鬼にもなれず米をとぐ

大阪市

西出一栄

めでたきは昭和の長さ初日の出

正月の顔で年玉とりに来る

過ぎし日の夢を追うかや老の私語

落椿色褪せぬまま地に奢る

美称市

安平次弘道

アドリブが受けて台本変えられる

ヒーローが生れチームの和が乱れ

おしやべりに女の顔が生きてくる

自慢話の腰を折りたくなる嫉妬

鳥取市

小林由多香

元旦のお神酒も積んで出る船出

改まる年へ仮面を脱ぎすてる

都会の縮図ターミナルで恋拾う

置葉満して過疎の冬ごもり

竹原市 三宅不朽

土貧しあかぎれの掌のなつかしや

梅一輪羅漢の膝もゆるみ初め

髪長くながく旧家の紋を嗣ぎ

さけられぬ吊橋なれば風もよし

泉大津市 村上春巳

まだ眠い眠い布団の温かさ

気合負けしたか野良犬道を変え

盃が冷えて電話は故郷言葉

戎さんに裏口がありドラもあり

岡山県 浜野奇童

礼儀かも知れず財布は出さず置く

家族旅行妻が弾んで子がはしゃぐ

物知りが一人園児の輪を乱し

ニコニコと笑うだけのもいる同志

大阪市 山川阿茶

人の情うれし涙のつづく日々

一人いても元旦は元旦の気分

お賽銭だけの出費のお正月

恍惚に縁ないつもの聴診器

諫早市 原田明春

娘につがせ妻につがせて今朝の屠蘇

倦怠期解けたか女房の迎え傘

炉ばた焼火焙の刑に似てあわれ

昼までを寝ていて女房のスト終る

大阪市 有信新之助

喪服すら値踏をされる焼香順

間に合わぬ身内へ容赦のないマイク

借金もある棺へ白木の扉が閉まり

浄塩ふる気になれぬ名残りかな

岡山県 竹内翁童

勇み足そんな若さを叱られず

不況感蜜にくるんだ社内報

心地良いお世辞に判断まどわされ

家計簿に叱かられ菜園のくわを振る

大阪市 天正千梢

とまどいは計った物尺狂ってた

食えないからいたずらな感傷やめておく

孤独な異端者苦しい道えらび

一億が「アーウー」の小父さんに引っぱられ

和歌山市 津田与史

正直についてる馬鹿をいま気付き

悠々自適にまだまだ遠い定期買う

よい話ありそう春の窓開ける

時計とは違う歯車持っている

和歌山市 若宮武雄

一木の栄え 下草は枯れるのみ

木石は閑か 老醜の憂いなく

沈思黙考 涯ない石のもつ命



人間のルールを喰う蟻の列

東大阪市 斎藤 三十四

人形になって娘の和服着る

民謡の古里こけしも踊り出す

美しい言葉で孝行してくれる

公私多忙で宴会には出ます

島根県 堀江 芳子

とうさんが酔うて元朝らしくなり

健やかな初春エプロンを外せない

愚痴ぼろり拾ってくれる夫がいた

決心がついても押してくる涙

京都市 松川 杜的

ボールペンの一言、賀状にある温くみ

確かに空がきれいな三カ日

百八つまでは聞いた事がない除夜の鐘

何をする人か元旦を日章旗

唐津市 新岡 回天子

厳冬の寒さに羊がチャンと居る

梅ヶ枝餅今日のうまさは合格日

巨匠書けばこれは裸婦とは又違い

一枝を切って盆栽置き直し

倉敷市 稲田 豊作

黄昏に逢えば哀しい友に見え

歳のこと忘れて暮らそうなど話し

神という文字も書いてる闘病誌

なに事も修練呼吸整える

倉敷市 藤井 春日

若者に負けまいとする読書です

ハッターが過ぎて手負いの獅子となり

あんななんか嫌いと内心燃えている

奇麗ごと云っちゃお金寄りつかず

笠岡市 松本 忠三

一時間程で退社という欠伸

三階が玩具売場と孫の奴

左ぎき野球選手にさせようか

出る釘へわざと手もとを狂わせる

羽曳野市 塩満 敏

私も日本人三味の音がしみる

冬を越す軒の玉ねぎ厚着して

国宝の軒とはつばめ知らなんだ

優勝のかけに厳寒の球ひろい

倉敷市 小幡 里風

一步二歩譲って妻と妥協する

狂い咲く桜に企みなんかない

パパもママも嘘が上手と子がほめる

計算高い女が転ぶハイヒール

宇部市 平田 実男

自殺者をうらやましいと思う日も

ネオンの灯ドブも女もきれいにし

たたいても埃の出ない無能者

日照権は主張風よけには触れず

大阪市 西川 誓二

旧正のつもりやろう遅配の年賀状

この歳になってもまだ利くへらず口

杖とも柱とも頼る金目減り

妻と添い三度迎えた未年

大田市 藤田 軒太楼

胸張って去る花道はふり向かず

老残の反骨一人で旗をふる

長話しつまるころは金でけり

片言が言えて茶の間の孫主役

岡山市 川端 柳子

才月の流れへ大きく目をつむる

父の意地阿々大笑をさせている

白菊よ花卉重ねた老の品

太陽がわき目もふらず東から

姫路市 植村 客遊子

自尊心ひげをはやして保たれる

ライバルの自己紹介から気障な奴

書き添えた句に本心を匂わせる

嘘ばかり並べ女の子にもてる

仙台市 川村 映輝

余ってる米まで値上げする日本

元日の電車あくびをのせている

淋しさに勝たねばならぬ母の顔

敵に塩送る心は日本人

玉野市 小谷 仙山

雨の日も私に好きな趣味が待ち

聞かざるの教で事が丸く済み

墓穴掘る酒と知ってもやめられず

正月は寝るだけ雑兵それも良し

松江市 柳 楽鶴丸

愛が芽ばえましたとベルが鳴る

鬼の面つけてもお人好しはお人好し

孫が笑うと姑も笑う

国歌でなかったら君が代をうたう

西宮市 若林 草右

なめくじよ裸一貫この俺も

亡父に似た髭の羊もおめでとう

花道を肩叩かれる勝ち相撲

丘の塚 大宮人の晴れ姿

伊丹市 樫谷 寿馬

日溜りの猫へ挨拶して坐る

絵ハガキの通りに雪が降った朝

転任の子が振り向かないでタラップへ

青竹の酒は六十歳らしく飲む

奈良市 宮口 笛生

元日の制服宿命に逆らわず

正月の通勤電車冷た過ぎ

老眼鏡妻も五十の顔となる

えべっさん過ぎてまだ来ぬ年賀状

大阪市 河井庸佑

参考に今年の運勢読んでみる

職に就きいやな社会を見てしまい

社会悪許せぬ無垢な新入社

卒業証書手にしたわが子へ涙ぐみ

大阪市 神谷凡九郎

一年の計を笑うてローティンの死

無難作に子供が死んで見せて呉れ

生は死はナンダロ子供また自殺

大人の眼子等の自殺へ何を見る

松江市 恒松町紅

スト続行賀状は局で眠る初春

ボinasはないが無職という自由

真昼間出会えば無職者同士

土曜日の意識薄れて来た無職

大阪市 室谷徹舟

小羊の如七十九年動き出し

配らない賀状を売って詐欺みたい

新調の靴を悔いてる初詣で

切り札を使わずに済む俸せよ

下関市 国弘半休門

七転び、八起き目の羊歳へ励む

井の蛙丘のマンション見て魂消げ

飼主に緬羊裸にされちゃった

千客万来スリッパの上歩く

京都市 都倉求芽

ひつじ年暖冬ウールマークを慌てさせ

菩薩さまにフラッシュ浴びせて拝まない

特急は土地の匂いを乗せて来ず

機嫌よい酒だと思ふ箸枕

枚方市 宮川珠笑

初詣でふる舞御酒の選挙臭

トレパンで日曜百姓敵初め

サラ金に兄の薄情責められる

急ぐ足暇つぶす足タミナル

堺市 伏見茂美

君が居て僕が生きてるとそきげん

定年の無い夫でして老けられず

旅人に無情兼六に雪が無い

宿のサービス悪いおまけに雨降られ

寝屋川市 宮尾あいき

芳紀正に六十八の新春よ

孫に出す御年玉の予算組む

福笹のおかめが私に笑いかけ

初詣地元の神様後廻し

東広島市 高橋鬼焼

風やんでぐっすり眠る風車

島の灯のひとつひとつが春を待つ

掃きなれた母の帯にくせがある

一月の詩にも雪がない街で

竹原市 時 広 一 路

蟻地獄笑って見てる奴がいて  
百分の一は蒸発懂れて

回り道だってもいいさ春だもの  
海まろし春の渚のなまろし

大和郡山市 森 田 カズエ

即席に馴れて試験も一夜漬け

花の無い吉野の宿を嬉しがる

トレパンで走って年を若くみせ

善人の持つ釣竿は動かない

米子市 増 田 竹 馬

下を向く羊の角に敵意なし

寒がりへ暖冬異変でよかったね

団結を教える蟻のエサ運び

アーウーの間 速記者手を休め

米子市 石 垣 花 子

親孝行車三日の旅に耐え

お茶の間の主役は赤いリボンつけ

割勘の車で飛ばす女旅

欲張った見物 宿で宵寝する

米子市 佐 伯 越 子

再起する私に過去がつきまとい

出稼ぎの父に稲穂添えてあり

初孫の頭は良いと信じ込み

青畳敷いて旧家の祝い事

島根県 錦 織 文 子

楽しみが宙に浮いてる年賀状

帝都へも出雲方言ついて来る

倅せは夫の笑顔がある限り

底辺で耐えた運勢もちつづけ

島根県 榊 原 秀 子

カナリヤも新春を讃える唄い声

きんかんを煮る刺されても円く笑み

白鳥の舞納めして北帰行

何か一つ愚痴る癖つきとがめられ

島根県 大 森 孝 華

スタートよあとへ戻れぬ意地があり

ポイントへ一言ほしい舌たらず

流れ雲男の意地が追い続け

風化した詩集見つめて旅六十路

鳥取県 林 露 杖

ジャンボくじ下一けたで夢終る

つい調子合せて軽口にらまれる

ターミナル喜怒哀楽の吹きだまり

弁護士も謂わば諸刃の剣かも

東大阪市 竹 中 綾 女

明けましてお芽出度くない年が明け

年玉を全部使う子預ける子

孫娘の結婚決まり亡夫に告げ



食べさす人來ると張り切るひとり者

和歌山市 垂井千寿子

遠廻り無駄でなかった人間味

尻もちへ痛さも痛し初笑い

友情のルール言いわけなど要らぬ

栄光の男の影に居る女

守口市 野呂右近

頼むより神に誓えときびしい目

決断の擲に或日男座す

釣書と言う人間の血統書

男にも馳込寺があつて良し

兵庫県 北山越山

真心が点と線とですれちがひ

はりつめた分だけ皺の数にする

寄り添えば妻は白髪を抜いてくれ

偽りの言葉はどこか風に舞う

和歌山市 吉野富子

諧謔が好きな老夫をパパと呼ぶ

マイホーム計算通りにならぬ赤

貶したりはめたり胸に生きる亡夫

駕籠舁と言われへんくつ馬が合う

和歌山市 内芝としよ

三月月へお願いかければ折れそうで

華かなバラも音なく地に還る

ウインクをすれば童話が生れそう

降り積る雪へ根雪は意地を見せ

姫路市 大原葉香

特売場麴をきそい合う鯉に似て

コルセット嵌めて自分を見失う

長生きの秘訣も三日坊主なり

おみくじの大吉明日が怖くなり

七尾市 松高秀峰

盆栽のような子供に育つて来

金屏風表彰する人される人

円高も不況も知らぬお年玉

サラ金で首の廻らぬ初詣

大阪市 柳原静香

一年の計妻の小さな貯金箱

子が呉れたお守りだから信じとこ

夫待ち子を待ち人生昏れてゆく

母が逝つた年まで生きる欲が出る

兵庫県 大江秋月

野焼きする土手に出ているもう新芽

新しい顔が出て行く美容院

ネクタイのとつときを出す初出社

ブランコの横で夫婦の笑う幸

桜井市 河合茂雄

矢印を真直ぐ歩んで出世せず

ドア開ける音に逃げてる千羽鶴

影法師の後から私は尾いていく

録音にとると居直る口車

寝屋川市 江口 度

座禪組む一十一が一となる

双六のふりだしに居る温め酒

千日手うつかり動いてはならぬ

いとも簡単に温泉の水を飲む

松山市 谷 真風

ふるさとの味が生れる柿すだれ

薬害をくすりをくれる医者にきく

久しぶり忙しそうな人と会い

愛嬌のよい犬が来て追い出せず

大阪市 藤田 頂留子

御大層な正月昨日の今日なのに

生き死にに年末年始いうとれず

兄の死

平均からは若死享年五十七

もったいないが大師と今二人

和歌山市 松原 寿子

約束が指の先から愛になる

振り向けば湿めった火薬になりそうで

胸の砂漠をうるおす雨となるあなた

かも知れぬ貧しき夢を温める

大阪市 神夏磯 道子

真直ぐな瞳に会って慌ててる

内職へのんきな小鳥の囁りよ

女王蜂花の香りは知らぬだろ  
しあわせな春にしようよ風車

大阪市 本間 満津子

新しい日記の期待に背くまい

備長に電子レンジは見下げられ

白旗を掲げそこなうて深手負う

冬の海不安な波がおしよせる

島根県 西村 早苗

妥協した握手よさめてからの悔い

誤診ではなかった長いながい廊下

指相撲野心が指の先きで燃え

狐雨夫婦無口の歎振るう

大阪市 横地 雅風

紫煙吐く簪やっぱりマダムです

民宿の別れがくれたみそみやげ

割烹着を笑う病妻嬉しく見

表彰状ずらり皆勤だけの額

豊中市 安藤 寿美子

ブランドに関心のない素顔です

指先でつまめる程の幸でよし

嫁二人娘が一人おらが春

玄関にうとましきものブーツなり

松原市 北野 久子

半衿をかける娘に手を添える

重箱へ嫁と姑の腕を盛り

ストレスのはけ口孫と小半日  
ツンボになってから道をよく聞かれ

大阪市 北 勝美

除夜の鐘終らぬうちに電話ベル  
鐘ついて紫式部こぼれ落ち  
囲まれて威げんを崩す父の顔  
緋の袴一息入れる杉木立ち

鳥取市 岸 無人

大空の誰のものでも無い広さ  
豚の毛の筆で豚の絵はかかぬ  
白い花活けて女の孤に耐える  
太ってる人と見比べほめさせる

岸和田市 島 富志子

追羽根が門を開けてと呼びに来る  
良い酒になった夫の年思う  
音もなく五十の年が寄って来る  
疎なった眼に白髪だけよく写り

鳥取市 佐々木 静 泉

### 結婚記念日

長旅の疲れを二人で療やそうよ  
良心がうずく傷あと一つ積む  
あしたへの大地へ何を蒔かんとす

大阪市 西 森 花 村

傘立てにピッケル何時か死んでいる  
展望台最初は我家の方へ向き

橋筋の地下に落ち付く元闘士

橿原市 岩 井 本 蔭 棒

開店の裏は木屑を焚く煙  
こんな魚うまいやろなあ水族館  
やっと子が手から離れりや孫が出来

貝塚市 行 天 千 代

嫁姑おせち料理へ気がそろい  
初春を又振り出しの一步から  
初詣で人の背中を拝んで来

呉市 槇 田 英 詩

母の瞳にあえば素直な子のころ  
ライバルと握手をすれば湧く斗志  
金魚まだ生きてくれてた寒の水

大阪市 神 田 秀 峰

### 初詣

神様も本家分家で人捌き  
賽銭が頭越しに飛ぶ過密  
外人も日本の神様祈ります

兵庫県 河 原 み の る

狗犬が阿吽の仲間見付けたり  
明けまして目出度さ探る令を知る  
喜怒哀楽知らぬ嬰兒の瞳は水晶

京都市 山 本 規 不 風

運を待つ心へ鞭を当てている  
父知らぬ子に父となる母の鞭

一度だけ銀行で威張るにや、なんぼ要る

鳥取県 清水 一保

功成つて故郷だんだん近くなり

永い病床より

病床の夢は窓外かけめぐり

人情が心の隅まで沁むベッド

鳥取県 森 田 布 堂

大山に雪沢庵石探し

表彰状授与額はあんたが買ひなはれ

勤務には出せぬ力をストに見せ

鳥根県 飯 塚 虎 秋

細々と余生を飾るボールペン

真向から反対をする三代目

棲みついた貧乏神にこずかれる

大阪府 欄 蘭

つじつまがうまく合い過ぎ疑われ

チュウインガム吐き出すように解雇され

解雇以来手打ちうどんも氣に喰わぬ

大東市 土 岐 トク子

過疎の春温し左遷の胸を張り

いたわられはげまされてる寡婦冥利

年金の母の優雅な花鋏

鳥取市 有 田 とし江

かけられた謎とは知らず本音はく

そして朝男はだまって髯をそる

ああ故郷つもる話の切りがなし

熊野市 坪 田 冬 花

自分の事ばかり話して妻の客

孫の世話せばやっぱり乗ってくる

病む窓へ一番怖い夜が来る

竹原市 鈴 木 かつ子

ひざの孫あやす茶の間の灯が丸い

あと押してくれる妻あり坂のぼる

働いている幸せに氣がつかず

鳥取県 福 田 保 子

印相で凝りず家相も見てもらい

花嫁の父の肩巾にある憂い

謎めいた微笑へ男のかん違い

鳥根県 太 田 亀 甲

掘炬燵金婚夫婦向かい合い

男達はいいな話を酒にする

雪降らず儲かるとこと損なとこ

大阪市 黒 田 真 砂

絵馬買って今年へ弾む第一歩

踏まれてる石の涙を人知らず

待つ事に馴れた女の白い足袋

西宮市 杉 浦 婦美子

ライバルがきょうも心の張りくれる

老残の重さ信仰へ逃げる

みたされぬ想い枯野はまだつづく



東大阪市 崎山美子

悪友に辻褃あわす知恵を借り  
まわらない首へすくいの除夜の鐘  
客席と舞台一つにとけてゆれ

竹原市 古谷節夫

主義主張越えた握手で春迎え  
中年の魅力を一杯着て女  
籠の鳥平和な声で春歌い

鳥取県 金川満春

こそばゆい老人医療費受給者証  
嬉しい日鶴が舞います父の唄  
町内へ英字新聞読むうわさ

正本水客

散りしいて今日は山茶花ちらぬ日で  
蠅歩く そろそろ暖い冬がゆく  
お稼ぎやすと いんぎんに眼が笑う  
牛のよだれの地につくまでに風が吹く  
ふるい心を捨てても月が従いてくる

浜田 久米雄

なみなみと酌げば盃持ち上げる  
独酌の加減妻にはわからない  
さかずきに春の匂いを感じたり

春近し一升瓶を仕入れとき  
むずかしい顔がほどけた昼の酒

本田 恵二朗

正直な暦今年は僕の干支  
羊年六回重ねて飽きもせず  
羊年可もなく不可もなく生きる  
七人の敵を知らない羊年  
六匹の羊引き連れ歩が軽い

菊沢 小松園

長期予報せめて明日を正確に  
引き汐に砂を抱えて裏返える蟹  
蜆汁ひとり暮しの舌に泌み  
埋立ての決った池のかきつばた  
倅せな乳房男の手で裏返えり

橘高 薫風

悼 大野源一九段

閻王の前でも飛車の気っ腑なり  
前歯欠けて恋俊寛となり果てる  
冬天へ冬天色のセーターで  
別離れては日日臨終というて遣る

若本 多久志

より添うてどうやら金婚喜寿の春

計画はまだ十年の寿命とし

医者からの注意 わびしいことばかり

妻病めば炊事の腕も冴えてくる

児童年 子等の自殺が胸を刺す

ベトナムが動きグラマン火をあげる

米中ソ、日までうろちよろカンボジャ

郵便のスト腹立ちを越えて行く

やりやすい土壌にストの腰下ろす

さあ新春だ徒党固めの地方選

この受話器置けばえにしも切れそうで

消しにまわるから噂風に乗る

ここからは云い訳らしい聞いておく

振袖姿おとな見る目と娘の見る目

日めくりも昨日は未練なく破り

空港の別れ隔離されるよう

遠廻り春の花屋の前に出る

ホーム炬燵妻の名簿もおいてある

CMのゴキブリ多い方が面白い

嫁姑刺繍の裏を見せずおく

尼  
緑之助

川  
村  
好  
郎

西  
尾  
栞

児島与呂志著

# 川柳句集「地下鉄」

刊行記念句会

日時 54年6月7日(水) 午後6時  
会場 金 属 会 館

南区鰻谷東之町10番地

(地下鉄堺筋線長堀橋下車東スグ)

(電話271・3935番)

柳 話  
兼 題

「足」

「改札機」

「乗りかえ」

「河内弁」

席 題  
会 費 当日(二題)と選者発表

千円(句集呈)

発行所・大阪市南区鰻谷中之町二〇

川柳塔社

序文 中島生々庵  
編集 不二田一三夫

頒価千円

(送料共)

# 川柳太平記 (10)

## 江戸気質雜俳往来

東野 大八

俳諧が芭蕉なきあと元禄・享保時代には、景物取りの賭博の様相に堕ちたのも、江戸や上方など三都の世相とそれをささえた町人階級の在りように眼をおく必要がある。

明暦三年（一六五七）の大火で、江戸城の壮麗な天守閣をはじめ、江戸市街の五五％が焦土と化し、死者十万余人を出した。幕府はこの大火を機会に大規模な市区改正をおこない、大名旗本の宅地引替と社寺の移転、避難用の大名下屋敷の下賜、広小路や火除地の設置などによって市内は面目を一新した。

後述するが、この時の行政区域の変更に代官支配の町や、神社の門前町は町奉行の支配に移し、町人町には名主制度が生れた。享保六年（一七二一）になると江戸町方人口は五〇一、三九四人で、その男女構成は男子三二

三、二八五人に対し、女子はなんと一七八、一〇九人と男子が圧倒的に多い。（その総数に対する女子の比率は三五・五％）このことは武家のうち旗本御家人は別として、参勤交替で江戸詰の武家のはほとんどは妻子を国元においていたためで、男子のうちの約半分が武家であった。

参考までにこの頃の世界の人口を述べると、パリ五〇万人、ロンドン四五万人、阿姆斯特ダム三〇万人であった。これに対し日本では京都五七万人。江戸五〇万人、大阪三十五万人で、京都が世界一の過密都市で、二位の江戸ですら、海外のトップのパリの人口に匹敵していたことになる。延享（一七四四～四七）になると江戸の町数は一、六七八町で大江戸八百八町のちょうど二倍という膨張ぶ

りを示し、その人口も軽く百万台を越えて京を抜き、世界第一の大都市にのし上ることになる。柄井川柳はこのとき二十歳そこそこ。彼がさきにのべた神社の門前町の名主を継いだところが、大江戸百万都市もさかりの頃という時点になる。

ともあれ享保年間の江戸は、開拓期のアメリカのように、女子の数が少いため女子を大切にする傾向が江戸のムードであった。需要が供給を上回る生理上の自然要請から、江戸の随処に私娼窟が当然のように出現し、その絢爛豪華な頂点が即ち吉原だった。

闇の夜も吉原ばかり月夜哉 其角

武家町人の区別なく、カネさえあればこの世の極楽浄土、吉原の股盛ぶりは当然だといえる。洒落本、黄表紙、浮世絵、歌舞音曲、演芸のメッカは、必然的に柳暗花明の吉原情緒を中心に発想され慶紀逸の如きこの道の青本詩人を生むことになる。この世相に慶紀逸の「武玉川」十五篇の登場をみるわけだが、その前提として元禄から享保期にいたる国内の一般状況にも一応眼を向けおく必要があるだろう。

総じてこの頃の国内三都は、江戸は武家の街、京は公卿の街、大坂は町人の街と大別で



きる。公卿はさておき、武家と町人のけじめをつなぐ物資は米である。武家の俸禄は石高だが、米穀だけでは生計は成り立たぬ。当然米を担保の金融市場が現出する。その中心が大坂で、江戸の出店が蔵前―いわゆる札差商人である。地方大名にも上納米を中心とした諸物資の領内経済には、それぞれの格差貧富の差があるのは当然である。金ぐりの苦しい藩主側が、扶置米の前渡金を確保するため、武士対町人の金の掛引が生じる。叩頭百遍、町人相手の金繰りも効なく内輪必迫して諸事不如意となる大名に対し、町人側は「不埒なるお家柄」「注意家柄」と不良大名をマークすることになると、百代の名家の家紋とてキズがつき、ヘタをするとお手挙げの事態ともなりかねない。

こうした相互の脆弱な投機性による経済基盤の上に咲いた東の間の仇花でもあった訳だ。この様な中央要路を抱えた一大都市部の投機主体の経済基盤に振り回される結果となるのが、後進地域の地方都市や農漁村である。藩費を支える上納米をめぐっての代官、地主小作人の階層には、不正行為が胚胎し厄介な天候異変の豊凶がこれに加り、事態は千変万化し、凶作が昂じると一揆である。明和二年（一七六五）に関東で起った一大一揆はその好サンプルである。

このような地方経済の破綻が、結局近傍の都市への人口移動を招き、果ては江戸、上方の三都の人口過密に拍車をかける結果となる。幕府の威信失墜は幕末に向って急速に傾斜を示したのは、いわば中央集権と地方行政の不均衡が招いた結果といえる。

甚だ杜撰だがこのような推移結果の江戸期の体質をまずは俳諧の雑俳化したその墮落ぶりの江戸初期の三都の場合に還元しよう。

江戸に限らず京、大坂の職人の賃金収入は常に不安定であった。このことが三都の下層町民の生活の体質を固定化した。江戸の場合明歴大火で上方からどっとくり込んだ大工、左官、石工、堂前師の土建関係の職人たちに

とっては絶好の稼ぎ場であった。しかし、武家、大店の関連性の中に従属した親方連中は武家気質に押し固った江戸の武家社会に同化し、蓄財を卑しめ金銭にてん淡な武家意識に感化され武家にひけ目を感じまいとする倒錯意識から「宵越しの金を持たぬ」という妙な江戸気質を醸成した。この江戸職人の浪費癖は、米穀や木材の投機性と、通貨改鋳という悪幣が招くインフレが、浮草さながらの経済基盤に拍車をかけていったことは否めない。

「あ日が長くて退屈だ。道具を砥いでも煙草をのんで待ち望んだとて仕事はこない。何卒割よい普請を請け取って十分金儲けをしたいものだ」（土農工商心得帖）

といった大衆心理の赴く先は、丁半ばくち、ぼう引、双六賭博への射倖心で、当然この方のプロが統出し、やくざ渡世が根を生やす。江戸民間側は町奴、士分の側では旗本の××組と称するさむらいやくざのぼっこだ。

「江戸はわきて人心不敵なところ、後日の分別せぬところぞかし」（西鶴「永代蔵」）

「江戸の都人は最も惨憺たる天変地妖に対しても滑稽諧謔の辞を弄せずんば己むあたわざりし也。滑稽の精神は徳川三百年を通じて一貫せる時代精神の一部たり」（永井荷風「狂歌を論ず」）。



# 俳風柳多留廿五篇研究

—(二十三丁)—



清 博 美

406 夫婦して雪打をするとなんた事

室山―「雪」という大義名分?が立って、吉原へ行ったか居続けたかの亭主の朝帰り。

此雪にあに女房を用いんや

五七・32

雪なれハよしとずつふり引かぶり

二・14

青木―賛。亭主朝帰り。手近かにある雪で夫婦喧嘩。

西原―同。亭主は敗軍。

岡田―同。

407 薬くわん西瓜をこきませる法事客

室山―「やかん」は、すっかり毛が抜けてなめらかに上げ上った頭。「西瓜」は、そのつるが少しついている程度に毛の残った頭をいうのであろうか。ともかく法事の客は高齢者ばかりということころか。

入江―賛。いわゆる大法事。

大法事西瓜はたけの地震也

六四・30

岡田―同。

408 一の糸斗り付イてるはらひもの

室山―三味線売り払う図である。娘が十九の厄年で死んだのであろうか。「一の糸」の「一」は二十引く一をあらわしているのではあるまいか。ともかく、一の糸は太くてなかなか切れない。

青木―賛。然し「娘が十九の厄年」云々は如何なものであらうか。主題句の三味線、大分ほこりをかぶった古ぼけた代物のように感ぜられるが……。

岡田―同。

409 乳が黒くなつてみのわへちつきよさせ

室山―主の子でざんすが産せなんすかへ

ならないが、

どの客がづばらませたと遣り手いい

末・24

ならたいへん。

うんだのをかたわのやうに五丁町

六・15

の世界。箕輪は吉原に近いので遊女の出養生のための寮があった。「ちつきよ(蟄居)」は、士人以上に科した刑の一で、閉門を命じたうえ、一室に謹慎させることへ、『広辞苑』。ここでは寮へ入れること。

岡田―賛。

410 どつしどし来る足音が三分也

室山―吉原最高の上妓「昼三」礼讃句。「昼三」とは、昼夜とも三分の略称。一日の揚詰は一兩二分。

いふうりんとしてかぶろを二人つれ

六三・19

安四・松2

で、足音も並の妓とは違う。

八木―賛、としたいところですが、屋三をそうあつさり定義されると賛とし得ず。この件に関しては、佐藤要氏が『川柳吉原風俗絵図』で詳しく考記しております。

「屋三」という言葉は「吉原細見」にはありません。ということは、正式な意味での遊女の階級ではなくて、一種の尊称の意を含めた俗称であろうと思います。それはともかく「三分也」とある主題句の場合、それをいきなり「屋三」とされることはいかがであらうか。「吉原の高妓である三分女郎」というような表現でよからうかと考えます。

岡田一同。

411 死はくれ大日本と書て見せ

室山 釣舟か何かが大暴雨に逢い、死ぬ思いの漂流の果、ついた所の人々のむくつけきさまに、てつきり異国と思つての光景。

日本かときいて上総てわらわれる

一生けんめい日本と書てみせ

一八・39

西原―「大」をつけたのは、外国と思つたからで、当時外国（世界）を知らない漁夫の自負がある。と共に、句の調子を調えるため。

岡田―江戸湾内の釣舟でいいでしょう。「大日本」と書いたのは、何日も海上に漂つたの

で、異国へでも流されたかと思つたから。

412 卵ほと嬢も夜なへのひさを出し

室山―肌を見せることに用心深い嬢も、夏の夜なべ仕事（針仕事あたりか）に夢中で、ほんの少し膝のところが出たのに気づかずにいる、といった情景か。「卵」はあらわれた部分の面積のほか、嬢の肌の美しさ、白さをも暗示している。

岡田―賛。

413 さしつこの弓がけをかけてて舟をこぎ

室山―「さしつこ」は「さしこ（刺子）」の促音化。「刺子」は、綿布を重ねて一面に針抜にこまかく縫つたもの。火消の消防服などに使用。「弓がけ」は弓を射るときに手指を傷つけぬために用いる革の手袋。

ちよつとはつきりしないが、刺子は掌で針を押して縫うらしい。その綿密を要する仕事に疲れて居眠りをしているのではなからうか。

入江―「刺子の手袋」。轡を漕ぐ船頭。ゆみがけ（ゆがけ）は、本来弓を射る時、手指を傷つけぬために用いる革の手袋。

青木―入江氏説賛。しかし、専門職の船頭が弓懸をして船を漕ぐ、はちよつと疑問

西原―壇の浦での源平の兵であらう。船を漕いだり弓を射たり。

岡山―壇の浦と治定は困難。しかし一例とはなります。

414 ねじめたがつてへんへこをならう奴ッ

室山―美形の三味線の師匠をなんとかしたくて、三味線を習いに通う男。「ねじめ（音締）」は絃をしめ調子をあわす。もしくは、その結果の音色。「べんべこ」は下手な三味線の音。この両者の縁語仕立がミソの句。あるいは、三味線を習いに来ている娘を目当ての場合も考えられる。

入江―女師匠を張りに通う男説賛。三味線の音締と「寝て締める」。

させそうな身ぶりで弟子がやたらふへ

二二・46

三味線を習ふ気も無く毎夜行キ

安七・仁3

岡田一同。

高橋操子著 千五百円・送料共

川柳句集 「千亀利」

川柳新聞から一生への情熱が川柳作品に反映されて読むものに感動を与え、生きるこの喜びを教えてくれる……

借金があるから自殺など出来ず  
合掌をすれば十指の素直なり

発行所 川柳塔社

— 同人 吟 —

秀句鑑賞

— 前月号から —

渡辺 曉 章

喪中欠礼ことしの夏は暑かった

高杉 鬼 遊

としのせいか喪中欠礼とか会葬御礼だとか  
という文字に受ける影響が追いつき加わって  
来る。特に暑い夏、厳しい冬は危険信号とか  
男なら来いと裏大山嶺し

河村 日 満

山陰に出張の帰り、海の見たい組と山の組  
に別れ、あこがれの大山に登ったことを思い  
出す。岳人さんならずとも山の句はうれし  
みとれてた奥様たばこすいはじめ

山内 静 水

好作家静水氏、ある日ある時眉目、髪型、  
服飾、履物の緒までウーンとうならされるよ  
うな奥様をみた、たばこ一本が美人否定の鍵  
ア、力、サ、タ、ナ子の宿題へ母は辞書

浜野 奇 童

あいうえお、ABC順の句は多いが、この  
句アカサタナで時間、人物、愛情をも感じさ

せられる、名校長で終わられる日を祈る。

切れる気になってお弟子をとりはじめ

若柳 潮 花

ハハー潮花さんの句やなど直感させられる  
一句、切れる気なんて句語もお目にかかる機  
会がすくなくなりよりしましたよね。

冬に包まれて無心に湖ねむる

工藤 甲 吉

東京の川柳研究以来畏敬の念で毎号自分の  
句より先に拝見させていただいている、この  
人の句こそ私には「川柳はこれだ」と感激。  
すこし横向かねば嘘が言えませぬ

嘉数 千代香

ご登場願う以下三人の女性作家無論お目に  
かかったこともなく年令など思いもよらない  
が毎号の句でそのお姿を想像している。  
垢のない下着を朝の支えとす

林 瑞 枝

句にあらわれたその人物に日本の女の良さ  
を感じさせられ、暗いニュースの多い現代、  
まだ日本は大丈夫という気にさせられる。  
思うように帯が結べて他人の計

岩田 美 代

これはまたこわい位出来た人物が表われ  
た、この句のような母を持つ娘さんはお母さ  
んの良さを子に伝える良い母になろう。  
大声で聞かれ素うどん云いそびれ

傍島 静 馬

うどんの句、目につき次第記録しているが  
余りにも身近かのせいかうどんで素晴らしい  
句がすくない、うどんの名句待望。

灰皿に祈りを貯めている無口

大路 美 幸

数多い川柳塔同人の中で拝眉を得た数すく  
ない中のお一人、いつでもどこでもこんな人  
物を見受ける、本当に頼りになる人物。

ボチ袋選るたのしさもあり十二月

高橋 夕 花

子は五人孫は十一みんな健、こんなのでお  
正月はとても賑やか、ボチ袋も昔に還ってう  
れしい図柄がふえました。

親の眼の死角で少年背伸びする

安平次 弘 道

おそろしいまでの非行少年のかずかず、で  
もこの少年にこれだけのゆとりがあり陰で見  
守る親の愛情を私は感じさせてもらおう。

人生のゴールにテーブなどはない

谷 真 風

三つ目の改号、昭和八年の川雜今治支部創  
立時代の貴兄、宵明、文庫、一風とお互い古  
稀きての健在と健吟を自祝乾杯。

大阪の歌舞伎人口どうなつた

大坂 形 水

故あって少年時代あの難かしい歌舞伎の芸  
題の大半を覚えたら私は今はテレビで満足して  
いる状態、この句は絵看板みて木戸までとい  
つた句で願わくば木戸を買って立見席でも  
その演技、劇中の人物、思想といった所まで  
見せていたきたい。若い世代は食わず知ら  
いで歌舞伎を題材にした句はとくく難解句と  
つき放す、たとえ歌舞伎人口は減つてもどん  
どんその世界の句を見せてほしいな形水さん



— 水煙抄 —

秀句鑑賞

— 前月号から —

三井 醉夢

おもねらず生き来し父の歩き癖

渡辺 伊津志

無くて七癖と言われているが、父親の歩き癖に、おもねらずと見た川柳眼は、子としての愛につきる「阿る」は面、「ねる」はねりあるく、顔を左右にきよさきよささせて相手へへつらいこぼるこあるが、生きて行く為には心ならずも阿ることの多い世に、頑固に筋を通す父の姿を男の眼にしていとおしく思う子としての真情……。父の思い出さえないだけに、一しお感動をくれた句である。

振り向けばお伽噺の二つ三つ

浦野 和子

人生の長い旅路で、ある日疲れて振り返る時、なつかしむお伽噺があると云う。メルヘンを持つ作者の天性の豊かさにふれて楽しくなる。淡い初恋もその一つになりそう。大切なお伽噺を胸に秘めて、又一步踏み出す女のしたたかさも匂う。何回も繰りかえし

読むと仲々の味を持つ句。

石で打つ釘へみんなの眼が落ちる

辻 文平

石で打つとあるからには棺を打つ釘だろう。三途の川を無事に渡れるようにと、祈りをこめて二回ずつ打つしきたりと聞くと、喪主から順に初まるこの儀式を「眼が落ちる」と淡々と表現されているので、一層かなしみが伝わって来て、さまざまな終章のドラマが展開する。思いの深さを押えてあり、句は言い過ぎぬことだと言う自戒を得た。

金比羅船船絵馬堂へ来てほとする

竹内 花代子

「こんびら船々追手に帆かけてシユラシユシユ……」と人口に膾炙された金刀比羅宮は、四国琴平町にある。はからずもこの地は私の故郷であり、戦時中はよく日参した。今も昔も、けわしい石段を登りつめ、一息入るための絵馬堂の光景は変わっていない。素朴な表現だが、金比羅船船と置いて、句が呼吸して来たと思う。

波風を立てずはらわた煮えつまる

福本 英子

一見、平和な民主主義、マイホーム型のやさ男に、言いたいことと言って暮らせると思いきや、今以て嫁と姑の確執あり、或はワンマン亭主、受験子の悩み……etc.。主婦たる者、波風立てまいと決意したもの、やはり人間の何とやら——せめて旅に出てうつ憤を晴らしましょうや、えっ／＼句にしたらストレス解消。共感大。

地の底へ響く挽歌を聞かせよう

川上 富子

地の底へ響くとは巧みな表現、時に女は、ヒロインになりたくなるのです。

試めされているのか薬また変り

中森 葉士人

両の手にずしりと薬を下さる。モルモットではないのです。医療への一矢痛快。

飲んで飲んで飲んで男の三カ日

満中 きく子

当世流行の繰返し「飲んで」「飲んで」はメロディが心良い。そしてこの句も。

暗い世相に白鳥飛来でホツとする

星野 侑正

丁度、大阪、三菱銀行強盗事件の真っ最中。白鳥は神さまだと思います。

母殿し五十の僕をまだ叱り

島田 昭治

叱ってくれるお母さんを持つお幸せ。叱れるおふくろさんになりたい。

憎まれぬ老でありたし芋をむく

太工 静子

あなたも私もやがて老人に。三猿になる老の淋しさは人ごとではありません。やさしいお人柄がにじみ出ています。

紙数尽きるので美しい句でしめくくる。

野仏の高さへかがむ廻路笠

矢野 佳雲

地に還る一刻落葉空を舞い

古田 鈍舟





## 正本水客選

三重県 川上富子

駅までをふたりで送る客も来ず

尼崎市 仲谷利美

ラムネころころり少女の日の音で  
身を守る嘘は華麗な方がいい  
冷え切った飯では戦さには勝てぬ  
流れ星願いは山ほどあります  
空白を埋めるに白はしろすぎる

愛知県 池田香珠夫

下手すれば畳の上で死ねぬ職  
妻笑うほどもおかしくない話  
夫婦とはそんなものだと取り合わず  
嫁からの電話僕には用がない  
外堀を埋めて相手の出方待つ

岡山市 船越汽水

土の上を跳ねて孵の子が遊ぶ  
寒の水震えて映る天守閣  
寒鯉が餌に寄る水は動かずに  
口紅を一皿ごとに引き直し  
少年僧足袋許されず落葉搔く

高槻市 竹内花代子

合格の絵馬を探しにもうデイト  
中国のパンダは芸を仕込まれる  
看護婦の疲れがわかる夜勤明け  
軽い病気で患者の中の情報屋  
ベッド並べて相隣れんで年の暮れ

京都市 松川芳子

陽溜りでパンジーが咲いている師走  
団地から鳩が帰ってくるお寺  
明けましてテレビ機敷の三カ日  
松がさね春の影置く金屏風

灰皿を一杯にして父と子の対話  
手をかけぬ料理の味を賞められる  
初詣で母のしきたり守る留守

元日の賀状淋しい音で来る  
ネクタイを変えただけのお正月

寝屋川市 小林 鯛牙子

布陣のように墓塚を置く千早村  
背を伸ばし五尺八寸煤払い  
世渡り下手のまっすぐな背よ  
寒月の小さいながらまんまるく  
進化した猫が小骨を立てている

羽曳野市 麻野 秋 畝

春咲かす花芽へ冬陽暖かし  
風に向いて坂を降りれば海に逢い  
無造作に切手を嘗める遅しさ  
草の実をつけて帰れり暮参り  
生きざまに惑いなど無し初春の貌

兵庫県 辻 文 平

美容師の好みで私いなくなる  
セーターを選るとき素顔のぞかせる  
初鏡亡母の白髪を思い出し  
火消壺に今日閉じこめて主婦は寝る  
うれしさをアイロン台の上へ画く

旭川市 朝 倉 大 柏

十字架の残る髻を抜ける風  
もう親の追えない視野に子らの旗  
宿敵の笑いに何かあると知る  
忙しい風に合せる妻の足

定年の気楽さ淋しい深呼吸

大阪市 堀 口 欣 一

新世界いまも粕汁かやく飯  
何鳥か知らねどやはり春の鳥  
なつかしや祖父伝来のスキー帽  
カラオケ騒ぎのように宵戎  
主題歌を派手に流して春芝居

伊勢市 山 本 光 男

凡夫婦

寄り添うて階段で読む古日記  
夫婦して冬眠の札貼るときも  
その折に夫婦の壁が低うなる  
夫婦かな二人羽織で茶漬け食う  
二〇年夫婦に玉手箱ひとつ

竹原市 古 田 鈍 舟

風あげる父少年のはしやきよう  
日々疎遠まだ年賀状とどかない  
何事もなかったように曲り角  
枯れてから素顔を見せる蓮の池  
あきらめてしまえば振りこ動かない

東大阪市 萩 尾 真佐志

妻子ある人だと云えばドラマめき  
一家言持って歩巾も確かなり  
金が好き女も好きと悪びれず  
恋人へ娘十九が駆けて行く

見渡せば妻子が視野にある安堵

岡山市 串田 句味地

掃き寄せの落葉も撮ってカメラマン  
言い勝った後で負けたなと思ひ  
すぐ消える虹がなんだか追いたくて  
温室で不平を知らない冬の百合

和歌山市 浦野 和子

神籠る山の容に触れて初春  
息つめて風の行方を見ていたり  
見も知らぬ街で尖った月に逢う  
女心紡いでほどこいて冬の夜

名古屋市 越村 枯梢

足音はみんなおんなじ雪の道  
石段を見上げてためらわぬ蝸牛  
ボスの座を追われた猿の目も赤い  
げんまんをした日は遠い蓮華畑

海門市 牛尾 緑楼

肩書きの取れた名刺で旅に出る  
すがりた言葉を軽くなされる  
スベアキー知らぬ男が持っている  
恋捨てたところに立っていた貴方

松江市 梅本 登美也

空と海ある日哀しい対話する  
遠慮なく叱る医者なりたのもしい  
何もかも終りぬ窓の雪明り

日記帖幸せすぎて埋まらない

兵庫県 中田 白李

よい年を迎えたらしい賀状が来  
兄嫁にけなされているうちの嫁  
枝ぶりを見つめるだけでよう切らず  
悲しくも単線貨物の通過待つ

川西市 氏林 洋敏

パトカーの中で示談を話し合い  
満ち足りているから去年をふりかえり  
はいという返事で親を安堵させ  
元朝のマラソン神社をはしごする

大阪市 岩井 公平

超高層に茜さしそめ初日昇る  
三十階シャパン満して待つ初日  
古稀と還暦がとり残された三カ日  
北斎の視角怒涛は富士を呑み

岡山市 柳原 孝柳

夢のない女枯葉を掃いて捨て  
ウイंकをする鏡が笑ってる  
憎めない女のうそを知っている  
老母には春の来るのが長過ぎる

青森県 波 ただお

(前月分)

写真犯に今日も床屋で睨まれる  
橋渡る時だけ何故か思索する  
ブーツ見て軍靴を想う十二月

他人より身内が恐いことを知る

和歌山市 福本英子

七草も戎もすんで夫婦つきり

遅配する賀状に風邪も乗ってくる

病む友の笑顔を誘う目張り寿し

疲れた顔の顔の顔鈍行車

寝屋川市 高田てまり

躓いた所で私鬼になる

母と子の隙間に父の坐を見付け

ところどころペンキが剥けた恋もあり

三カ日休んだ女太り出し

岡山市 砂田静佳

クラス会敬老会かと聞く車掌

学生服ハンガー重たい冬休み

忘れよう握りこぶしの力借る

雪景色山茶花の赤もうれしそう

今治市 矢野佳雲

思春期の親を見る目の濁り勝ち

言わされる愛の言葉にもう疲れ

味噌汁を一言はめて冬ごもり

撫で肩の母で不運に堪えている

島根県 木村はじめ

愚痴になる過去振り返るまい寝正月

振り向けば犬が尾をふる寒の入り

五十回忌真正直に生きた父

ホーホーがアーウーになっただけのこと

呉市 山根喜代美

生涯を誓う聖書が重たくて

青い鳥逃がしてならぬ曲り角

飾り気のない母さんにある温み

マリオネット時に自由な糸を恋い

鳥取市 中森葉士人

三が日野良猫エサをとりに来ず

喪中欠礼雪呼ぶ風に乗ってくる

ターミナルから容疑者の跡消える

引き算がぴったり合ったむなしさよ

八尾市 田中紀美代

約束になかった子供がついてくる

初風呂の二人へ電話のベルがなる

木枯らしに合わせ雑草唄い出す

あったかい初春が連れ出す子も妻も

竹原市 岩本寛子

おみくじを結ぶ指先から春がくる

月冴えて女の表情みてしまう

たし算が女をずるくさせている

妻の愚痴じょうずに聞き流していて平和

諫早市 江副二牛

海鳴りが聞えイルカの芸が落ち

女あるじ女にかえる仕舞風呂

雑音に馴れて真実見えてくる



人生に体験と云う襷を積み

和歌山市 堀端 三男

ムード派はカーステレオも第九で

航跡を直角に切るヘリポート

高気圧さまさま老に冬温し

雨垂れの音にも詩情感じる日

岡山市 花田 たけ志

落ちぶれりや伏目にみえる鬼瓦

鉢植に咲く気か否か問ひ質し

客去んでさてこれからがお正月

子の愚痴へ次元が違う母の顔

岡山县 池田 半仙

今朝小雪白山茶花の花が消え

半音は狂った歌手が売れている

末っ子の相談肩の凝るはなし

正月火事の焼跡みかん目に痛い

島根県 松本文子

だまされてみよう今年も従っていく

愛という方程式がまだ解けぬ

メロドラマー人気楽に泣いている

飲みこんだ涙チクチク痛みだす

富田林市 中村 優

耳たぶが赤い男のセレナード

嫁き遅れ姉の誇りを胸に秘め

へそくりで男の沽券買って出る

実印を持たしてくれぬお人好し

今治市 渡辺 南奉

すぐに泣く母の慈愛をもて余し

すばらしい今日を夕陽が今沈む

裸になったらどちらも無ほん起こせない

日の暮れる早さしあわせ過ぎるから

岡山县 二宗 吟平

入れ智恵に行けば相手が腰をすえ

子がくれたボーナス温い年の暮

古いのがあるのに温いと買うてくれ

手紙にて辞職願いが帰ってき

新宮市 辻 式

沈む陽は明日に任せて高軒

遺された妻の喪服のしつけ糸

石投げて波に愚かさ教えられ

引潮の未練貝殻濡れている

八戸市 島田 昭治

三カ日妻の小言は普段なみ

心から嬉しいときは直ぐわかり

世も変り電話で年賀を云ってくる

正直にバカつく僕で悔はなし

出雲市 園山 多賀子

乳離れ遅い男はもてませず

練り上げた構想若さに水さされ

古稀にして尚処世術夫は説き

藁塚の姿勢に浮かぶ個性見る

高知県 山下 登

除夜の風呂延す骨太のわが手足  
土佐なれや冬日に日傘さす人も  
ストーブの湯はたぎりおり句作する  
屋根掃除となりのざくろに手がとどき

大阪市 小谷 清 女

病院の椅子で明暗話聞く  
バランスのとれた夫婦にないだ海  
孫と持つ風はおどけて笑わせる  
心地好い疲れをくれて娘等は去に

高槻市 大垣 たもつ

生垣も丸く刈られてお正月  
ポックリのついでに長寿をも頼み  
停年の間近い椅子を祝われる  
南妙法蓮華経男の連れができ

尼崎市 中辻 千子

孫に懐かれトイレも落ちつかず  
孫と共にままとするには多用過ぎ  
物資豊富でも授乳の眠けは変りなく  
孫帰る静けさがあり亦淋しさも

新潟県 高野 不二

八方美人で過す外なし町議選  
女房と意見が合わぬアンケート  
娘は妻の味方とわかるアンケート

父を評してまじめすぎると云う子供

豊中市 満仲 きく子

ともかくも目出度い姑の米寿  
煩悩がうじやうじやわたしの生きるめど  
三カ日やっぱりしてた水仕事  
急ぐことないわ死ぬまで生きましよう

羽咋市 三宅 ろ亭

晩成を期した日記に恥かしい  
教え子が名刺を呉れる通勤車  
立つ白髪切らせて冬の夜が長い  
投げ棄てるように唄った歌曲受け

吹田市 藤原 世史春

神さまのバーゲンセール初戎  
千円のお札がつけば神の笹  
飛行機に乗るよな気持ちでフグを食う  
勝った者が歴史を書く権利もつ

岡山市 原田 凡太郎

愚痴言わぬ妻を物足らなく思い  
孫二人どちらもおれに似て佗し  
長生きを保険会社ははめてくれ

山口県 高崎 雀声

すすき枯れ土手は自分をとりもどし  
泥靴ですまなさそうに雪を踏む  
ふるさとは盆と正月だけのもの

島根県 岩田 三和

意地みせる割られた石はころばない

一匹がはねればみんな跳ねる魚籠  
エブロンを分家の嫁は持ってゆく

尾鷲市 渡 辺 伊津志

美しき自信夕陽の橋に立ち

一テンポ遅れていつも肥えており  
ジーパンの裾をちぎって卒業す

寝屋川市 福 富 隆 子

孫みんな親に似ている面がまえ  
朝寝の理由暖房のせいにする  
ちぐはぐの心通わぬ夕餉の茶

橋本市 森 脇 善 彦

たっしやでな母の余韻が背に残り

潮騒に別れる心消されてる

芯まで凍り山茶花に触れてみる

島根県 星 野 侑 正

ポーナスも歳暮も無縁土に生き  
父さんの歌う軍歌は音痴めき  
満ち足りた幸福菊の花に似て

大阪市 藤 森 小雅子

子に託す夢にも妻の自我がある  
言論の自由キープしたボトルが既に空く  
老らくの恋だと云われ蜜柑剥く

松江市 黒 目 大 鳥

栄転の名残りアマサギ最盛記

カメラ見て鶴大股に二歩三歩  
流れ三味雨の余情のお湯の里

島根県 角 耕 草

初鏡うしろに夫が立っており  
初詣関西弁が前をゆく  
雪囲いして雪のないお正月

青森県 五十嵐 操 史

独楽まわし段々と輪が拡くなる  
手品師は種を明かして笑わせる  
神々にお詫びをしては神酒を酌む

唐津市 松 垣 岩 光

平凡な我が家へ初春の陽がこぼれ  
あべ川に磯巻ようやく餅にあき  
追い越した車のナンバー読んでみる

倉敷市 中 島 彩 平

門松は不況に耐えて来た誇り  
吠えたとて番犬鎖の長さだけ  
さらさらと砂紋を崩す春の風

豊中市 田 中 善四郎

逆らわぬ事覚えたりお元日  
憂いない時に空見る懐ろ手  
ごめんネとそんな仕草に救われる

大和高田市 岸 本 豊平次

百パーセント信じてるからこそ落下傘  
石橋を叩く自分が疎ましい

自覺してきたのか夢も小さくなり

熊本市 有働芳仙

パパひとり冬を愛する人になり

日本の裁判所の長いこと

遅しく伸びた老樹の坐りだこ

唐津市 岩崎実

通勤の初あいさつのクラクション

洋風の海にかかりて天主閣

元朝の雑木林の枯葉踏む

長崎県 岩崎和子

真剣なまなざし親のかたを持ち

子供等がきめたこたつの席赤し

最初から妥協せぬ気の薄笑い

東予市 小山悠泉

ワックスで化粧みかんのきりよう良し

冗談が冗談でない本音聞く

福寿草今年の運が開けそう

唐津市 田口虹汀

憎くまれぬだけのけじめはつけて置く

脇息の要るほど智慧は出さぬ明基

ひろ坊氏逝く

古稀の座を待たず句だけを置いて逝き

鳥取県 加藤茶人

開運に気付かず石橋まだ叩き

妻少し酒もいけます共稼ぎ

子が果立つこれもひとつの裏切りか

和歌山市 坂口公子

月光へ咲くしか知らぬ花へ思慕

とんどして孫の背丈で知る熱さ

積ってる雪へ接着剤をつけとこか

兵庫県 野々口 ゆう也

大晦日妻にやりたい越年賞

悔一つ捨てられぬまま年を越し

春新た政治の薄陽老が待ち

鳥取県 前田紀子

即席のカップル組んでテープ切る

妻の意地やりくりしてるとは見せず

はずんでる心鏡に見透かされ

倉敷市 中津伊勢吉

可も不可もなく平凡の年が暮れ

長生きのプランを抱いて寝正月

来てうれし帰ってうれし孫の数

唐津市 山下勝一

懐手してパチンコがついている

頑張ってますと位牌に屠蘇そなえ

年新た食うことのみの一人旅

唐津市 浜本義美

酒ふくみ芳名板の筆をとり

雑談がはずんで焚火灰になり

陽が当たるアパートの窓カラフルに



青森県 荒田 つる

行末へ妻は不隠な事を云う  
妻よ知れ男に云えぬ事多き

蛍光灯あかんあかと灯いている

町田市 竹内 紫 鏑

元日も働きぐせのモンペ穿く  
三代会得体の知れぬ女来る  
特価品売場で暮の小半日

東広島市 石井 さわ子

馬蹄形磁石さし絵に生きつづけ  
盤上を旅した銀と泣いた銀

駅に入る徐行で店が憶えられ

兵庫県 高橋 近郊

終電の男の靴がちびている  
朝がたの眠りをさます雨の音  
華やかな絵具がほしい老いの部屋

岡山県 岩道 博友

日誌抜粋我細腕の回顧録

事後承諾知ってた俺のイエスマン

返礼はいつも勝栗速達便

倉吉市 一風 庵

熟睡の顔へ勝手な批評する  
サインして済めば強硬論になり  
激励の手紙を出しても来ぬ返事

橋本市 岩倉 天彦

迷惑をかけたくないと老の私語  
将棋では二段融通きかぬ人

我が窓に雀の鳴かぬ日が淋し

長崎県 村崎 三車

釣りあいがとれぬと上座に坐らされ  
悪友のスピーチ持ち下げ持ち上げる  
阿々大笑女はそばに寄せつけず

出雲市 吉岡 きみえ

唐草の模様にくむ母ごころ

雑音の中で生き抜く町工場

盛装の家紋旧家という奢り

出雲市 板垣 夢 醉

ダンスならお相手します女社長  
カラオケで唄う若さが父にあり  
体臭をことさら臭いてフトン干す

羽島市 伊藤 静枝

けちり出す男に愛の冷えを知る

さめざめと泣く子に母も後悔し

胸襟を開くと女後すぎる

鳥取県 武田 照子

賀状来ず年に一度の安否待つ  
初風呂に裸の年賀交わしおり  
口出して旅行の世話をたのまれる

尼崎市 中塚 喜甲

親の目が娘をカップルに繋いで見

夫逝って鏡忘れる日々となり  
腕白の枕寝てもよく遊び

大阪市 平井露芳

人形で肥満短足見直され

視聴率最後に上げて田宮逝く

脚四本替えられコタツ廻り

岡山市 井上柳五郎

賀状の筆跡鑑定して名前がない

年賀状が来ぬと気遣う電話口

掃除機が静かな二日にもう響き

広島市 すがかつこ

手ごたえのない敗残よ昼の月

赤い風船どこまで行って死にきれる

祭の跡の三文オペラがいつまでも寒い

榎原市 西本保夫

囑託の物腰重役と間違われ

囑託はただ御苦労さんですみ

囑託へやはり気の合う友が居る

泉佐野市 大工静子

午煮煮る匂い大晦日の硝子拭く

命日のこと旅先から嫁に云う

旅先で忘れた年賀入れて出す

青森県 波 ただお

雪国に雪降って来て喜ばせ

国民へ増税というお年玉

百力日過ぎて線香の匂い沁み

大阪市 津山刀水

よいことをするのに言葉などいらぬ

温室の温さが好きでまだ死なぬ

鳥取県 羽津川 貴之

風邪でもいい一日ぐっすり寝てみたい

やりくりの出来ぬどん底だつてある

倉敷市 大森登竜

門松が暮の多忙に気兼ね顔

裸婦の絵に布団一枚書いてやる

唐津市 桑原掬治

ふたりかな暗に明滅たばこの火

虫けらも何億年の先祖持つ

熊本市 北川一進

石段を数えるメモの足軽く

拭いている筈の机の無駄話

大阪市 白石 潔

飲みおさめ飲み始まりと除夜の鐘

美しいおかみの欠伸見てしまひ

島根県 佐々木 裕

口笛に青春の夢を配達夫

初会合落ち着く先は初麻雀

島根県 山根峰雪

文芸欄夫婦そろうて句がならび

連休で一泊二日の老夫婦

出雲市 園山 栄  
どう貯めて見ようと知れた貯金箱  
されど愛冷えてとべない千羽鶴

出雲市 高見 鐘堂  
目覚しがおしえて呉れた妻の留守  
新築の警察中味は古いまま

倉吉市 野中 御前  
潮騒に負けじとはじく津軽三味  
つつがなく過ぎし日数の小役人

兵庫県 川井 白峯  
年明けて金槌の音世は動く  
高見山負けてころんで喜ばせ

大阪市 本多 俊子  
母逝きて見せるすべなき菊の花  
女あり神の摂理のありがたし

唐津市 玉置 嵌  
山見ればいきり出すのがブルドーザー  
堺市 檀野 茂子

★  
53年の4月から受持った水煙抄の選も3月号で丁度1年、アッと

### 一年間ご苦労さまでした

この穴埋めを書いてると、どこからともなく「螢の光」の曲が流れてきます。ここから新しい同人へ何人かが巣立って行きました。

云う間に過ぎたような気もするが、漸く皆さんの句風も飲込めてきただけに残念な気もする。この作者はと属目していた何人かが川柳塔へ（同人吟）羽ばたいていかれた。水煙抄の持つ嬉しき宿命でもあろう。

★  
この一年間、皆勤の方は40名、一カ月ぐらい欠けた方々を加えると70名を越す投句を得た。延にして311名に近い。変らない御精吟をお願いして置きたい。終りに熱心に投句を続けておられた新川貞祐氏と、三浦ひろ坊氏の御冥福を祈って筆を擱く。（水客）

大州市 米澤 暁明

春風をえびすまわしが連れてくる  
立候補予定花輪がそうしやべる  
緬羊の背背背の地平線  
風あげにいてましたんや自家用車

岐阜市 市川 鱗魚

にげるから罪と言う影ついて来る  
首の座に直るとにくい甲虫  
視野外れた時にきれいになる女  
温め合う事なし夫婦きり日向

★  
ありがとうございます。

水客氏はまれにみる清廉な方で、国鉄川柳の大御所的存在です。そしてキチンとした性格で、たとえばみなさんからの句箋を全部同一寸法に貼り紙をしてから選をされます。編

集部へ原稿が回ってきませんが、包装を二重三重にするという慎重さには頭が下がり、おもわずおしいたぐことがあります。一年間、ありがとうございます。

（編集部）

# 新年句会の

## 柳話から

中島 生々庵

皆さん、新年明けましてお芽出とうござい  
ます。旧年中は、いろいろお世話になること  
ばかりでございましたが、本年もどうぞ不相  
変ご厚誼の程をお願申上げます。

お蔭さまで川柳塔も、歳々に人並様の歩調  
にどうやら合わせることの出来そうなところ  
迄、内容も外観も整えて参りました。そして  
他社の方々からも、川柳塔さんは立派だ、羨  
やましいとはめて頂くのを、ちよいちよい耳  
に致します。お世辞が半分たろうとは思いま  
すが、悪い気がせず、うっかりすると、てま  
え天狗になりかねないことさへあります。そ  
ろそろ成年式を迎えるのですから今が一番大  
切な、肝腎な時代だと自戒して居ります。そ  
して最も恐れることは皆さんのご厚情と、ご  
期待を少しでも裏切るようなことがありはせ  
ぬか、ということであります。幸なことに、  
ステップ バイ ステップ。背伸びをしない  
歩みを続けて今日まで大過なく過ごして参り  
ました。思い起こしてみると三年前の一月、  
若本多久志を団長にして、副団長の西尾葉、

菊沢小松園、橘高薫風、野村大茂津等大挙し  
てハワイ訪問し、日米交歓川柳大会をワイキ  
キ、カイマナホテルで現地川柳吟社の大歓迎  
の裡に催された事、昨年は大坂形水、高橋操  
子を引き続いて豪華な句集を発刊したこと、  
本年は五月そろそろの吉報として、児島与呂  
志、若本多久志の両氏が句集発刊の準備完了  
の報があり、殊に多久志は第二弾の句集とあ  
るから、以つて壮とすべく、このふんでは誰  
れかまだまだ続いて計画して居るのではと憶  
測したくなる程であります。

とにかく世の中に芽出度いと呼ばれること  
は沢山あるでしょうが、こうして新年句会に  
元氣な顔を揃えて年賀の辞を交わすこと程、  
芽出度いことはいらないと思います。どうぞ皆様  
健康に留意されて楽しい生活の中に作句にご  
精進あらんことをお祈り申上げ、ますます、  
川柳塔を可愛がって頂きますようにお願いし  
て、新春句会のご挨拶と致します。

## 新春のつどい

昭和54年1月28日  
心斎橋・大成閣

本年度の新春役員のつどいが1月28日大成  
閣5階の大広間で催された。

この日の午前8時41分、銀行ギャング史に  
かつてない猟銃強盗へ一挙に突入、銃撃戦の  
すえ逮捕。26日午後2時半ごろから逮捕する  
までの42時間、われわれもテレビにかじりつ

いていたことだが、それから五、六時間後に  
ここ大成閣へ出席された方々もこの話でもち  
きりだった。

さて、こちらはそんな殺風景な場面のない  
笑顔、笑顔の集りである。

川柳塔発展策のお知恵拝借ということで、  
ご出席の方々から活発なご意見をいただいた  
が、その前に生々庵主幹のご挨拶があった。  
家族的な和気あいあいだけでは社の発展に  
はならないとされ、より健康な歩みをつけ  
たいと、力強いお話だった。

つづいて多久志氏が起たれ、お酒のまずく  
なるような話はやめときますと、役員諸氏の  
愛社精神を期待しながらバトンをつぎへわた  
される。元氣になられた多久志氏へ皆さんの  
ホッとした顔が明かるい。

好郎氏の「乾杯」の音頭に「しっかりやろ  
うぜ」という決意が諸氏の眉宇にあふれてい  
た。

柳宏子氏の司会で、諸氏の隠し芸がつぎつ  
ぎに披露される。トップは奇術の瓢太氏の芸  
はプロのもの。歌謡、民謡、浪曲、歌舞伎の  
声色（こわいろ）等々へ社への建設的ご意見  
もミックスさせ、小松園氏のヨガの妙技をト  
リに楽しむ酒宴に幕がおりる。（F）

出席・柳宏子・与呂志・一三夫・瓢太・柳志  
・鬼遊・三十四・太茂津・与史・紫香・水客  
・潮花・雀踊子・古方・滋雀・寿馬・形水・  
百酒・小松園・一二三・笑痴・吸江・生々庵  
・好郎・葉・多久志・文秋・千梢・ベ女・敏  
・酔々・天笑・諸氏。



# 愛染帖

## 橘高薫風選

大阪府 小 出 智 子

新しいカレンダーほど強くなし  
少々のことでは笑わないポスト  
孫ができたから私のことを考える

今治市 月 原 宵 明

反撃の時を窺う冬の海  
電気器具の世話にはならぬ舟世帯  
かもめ舞う人間不信唄いつつ

八尾市 高 橋 夕 花

石段の登り始めに先ず折り  
琴線に触れた言葉が雪になる

唐津市 新 岡 回 天 子

乗りこえてのり越えて来し八十年  
片隅に眷うたがわぬ芽が出てる

川西市 戸 田 古 方

子をつれて水子の供養してかえる  
サル知恵の果てがこさえたコンピューター

倉敷市 水 粉 千 翁

許されて罪の重さのヒゲを剃り  
三步退く男口惜しさには触れず

青森市 工 藤 甲 吉

雪の華しばし心を通わせる  
思い出をたどれば遙か乳房まで

伊勢市 山 本 光 男

三ヶ日羊の皮を着て歩く  
喜劇村はずれにかかる温い橋

和歌山市 桑 原 道 夫

真夜中に目覚めじつとしています  
止り木の隣りに人が坐つてた

尾鷲市 渡 辺 伊 津 志

樹の幹に掌を置き耳を傾ける  
人恋いの心に背く花が落ち

岡山市 川 端 柳 子

オルゴールかしづく夫があるを説く  
嘘一つ心に赤い尾を引いて

大阪市 河 野 君 子

炎抱く女は風を生みやすし  
啓蟄や娘の目覚めしはいつのこと

神戸市 宇 佐 美 和 子

心中の一步手前の紅椿  
風花やくちびるにあるは既に昨日

東京都 山 根 白 星

曇りのち晴れのそなたを信じよう  
武蔵野が斜がれ関東ローマ屋

八尾市 大 路 美 幸

初詣で不意にいのちのこと願う  
初詣で月は願いの背なにある

和歌山市 松 原 寿 子

山脈の肩にあなたの海がある  
逢いたさのつるの日日記に字を埋める

香川県 三 井 醉 夢

郷里から出た大臣につてがない

嫁ぐ日も決まり小犬を拾てくる

松江市 黒 目 大 鳥

東風吹かば鉄の匂いのこもる町  
東風吹かば湖はワカサギ風物詩

島根県 堀 江 芳 子

去ぬる子の靴を揃える佗しさに  
咳五つ六つ察じてくれる子と

倉敷市 中 島 彩 平

スモッグの無き日へ高く羽根をつく  
忘れよう亡き児の玩具振れば鳴る

島取市 但 見 石 花 菜

怠けるも骨が折れるよ三ヶ日  
鏡見る俺に手頃な顔がある

島根県 角 耕 草

山初父が使った砥石癖  
戦をつくりながら大きく敵

藤井寺市 西 い わ を

枯れる迄この花見せまい心して  
保護色に替えて雷鳥人を待つ

島根県 飯 塚 虎 秋

喜寿余情子は親になり去に急ぐ  
なつかしい訛りで友の訃音聞く

愛媛県 宮 尾 あ い き

すてられたビー玉路上で虹を抱く  
梅の香が古いの心をふくらます

神戸市 来 住 タ カ 子

雪の午後知性を楯にして訣れ  
向き合って飲めば盃軽くなる

東京都 村 上 由 希 子

乳房だけが知っていました風の朝  
なまけものなまけなまけてなめくじに

愛情の指は額をボンと突き  
義勇公に奉じ生涯未亡人  
鳥取県 鈴木 村諷子

保険屋に行けとお告げの福の神  
懐旧談竹馬の友の顔となり  
大阪府 西森 花村

コート着て顔までミンクめいて来る  
吉備路ゆく霞の彼方春の塔  
倉敷市 藤井 春日

掌で温めてた夢攫われる  
沈黙の背に炎えている憤り  
和歌山市 福本 英子

頭から入る茶室にある深み  
ニコソンの節太き手で汗をふき  
米子市 佐伯 越子

一ヶ月見ぬ間に孫の二重あご  
二十年の職場に名残りの涙わく  
岸和田市 清野 こう

喜びに変える悲しみだつてある  
どうみても足の置場が気に入らぬ  
大阪市 北 勝美

当然のように毎日白い飯  
筋道を通して敵を又殖やし  
唐津市 故三浦 ひろ坊

灯籠を小さく換えて庭を継ぐ  
暗闇が怖い原始の血が残り  
京都市 山本 規不風

悠然とさも悠然と老いにけり  
島根県 小砂 白汀

伊丹市 榎谷 寿馬

この辺で一度花束投げ返す  
使途不明我が家の額はたかが知れ  
唐津市 松垣 岩光

柩送るに厳然として冬の川  
抱く遺骨遺志思う時軽からず  
鳥根県 榊原 秀子

葉はたんの芯に未練を秘めておく  
子に美田残すどころか火の車  
大阪府 西出 一栄

春の海の調べで新春の百貨店  
鮮やかな彩だけ掬う昔ごと  
富田林市 岩田 美代

繕いが混らぬうちの走り書  
食ひ違ひ握り鉄の愛憎よ  
兵庫県 遠山 可住

大吉が出る迄ヤングみくじ引く  
鴻毛の軽き臣下で終りそう  
名古屋市 越村 枯梢

これぞ天国大草原に羊群れ  
ブランコに揺れ孤独だな平和だな  
和歌山市 津田 与史

幕上がるタイムトンネル一つ飛び  
しもたやも店やも吊す柿どころ  
愛知県 池田 香珠夫

祖国すてた船がさ迷う新春の海  
ボスの座を降ると猿もうとまれる  
鳥取市 河村 日満

栈橋の月を崩して船が着き  
山茶花よ貝殻虫に負けるなよ  
高槻市 若柳 潮花

倉吉市 今村 夕路

陽光へみくじ読み合う尉と嫗  
しんみりと夫と酌み交う春の酒  
宝塚市 吉田 笑女

待つ場所へ姉さんが来て恋終る  
太陽に誓って朝の鎌を研ぐ  
八戸市 小泉 紫峰

一人来た出雲大社に愚痴を言い  
悔多き命へ亡父の亡母の顔  
東大阪市 竹中 綾女

ふる雪の田圃を耕に織つて見せ  
寝正月後半生の線をひく  
竹原市 三宅 不朽

文章にすれば嘘でも救われる  
おしゃべりの母を少女は許せない  
兵庫県 辻 文平

情熱を冷凍にしてみつ女  
羽曳野市 麻野 秋畝

大阪府 山根 喜代美

大阪府 山根 喜代美

大阪府 山根 喜代美

大阪府 山根 喜代美

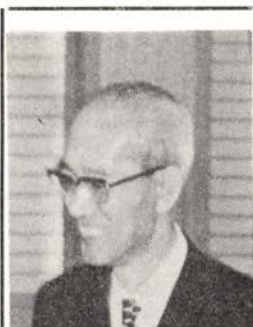
大阪府 山根 喜代美

ポケットの小銭でつまらん物を買ひ  
鳥取県 清水 一保  
一片の雲に今日の生命を見つけた  
米子市 小西 雄々  
給料の割に隣りのいい匂い  
京都府 都倉 求芽  
気がつく度に山が遠くへ逃げて  
島根県 堀江 正朗  
盲人の耐えねばならぬ音の中  
新宮市 大矢 十郎  
小さい駅小さい宿よし一人旅  
富田林市 中村 優  
昭和っ子胸が叩けぬ胸を病み  
町田市 竹内 紫緒  
四季語るうち床屋の賀状  
東広島市 高橋 鬼焼  
一本のマッチも春の風を待つ  
大阪市 小谷 清女  
変り種低血圧が一人いる  
羽島市 伊藤 静枝  
佗助の似合う重なり母郷の産  
岡山市 砂田 静佳  
部屋毎に香りをおいて庭の梅  
出雲市 園山 栄  
首かけた具申上司が石になる  
平田市 久家 代仕男  
看護婦がGパンで来る診療所  
岡山市 井上 柳五郎  
捨てきれぬ記憶あの時あの時が  
倉敷市 中津 伊勢吉  
一旗もあげず平凡古稀となり  
大阪市 藤森 小雅子  
美辞麗句並べ替えても嘘は嘘  
竹原市 古谷 節夫  
会者定離夕陽静かに海へ落ち

閑止んで踊りととまらぬ鳥島  
宮城県 小林 鯛牙子  
枯枝におみくじの花白すぎる  
登米市 高田 てまり  
持ち味がわからぬまの離婚歴  
岡山市 池田 半仙  
妥協するには条件が多過ぎる  
多摩市 山下 勝一  
手焙りに何んにも言わず通じあい  
島根県 西村 早苗  
冬の駅人待つ顔の娘が一人  
竹原市 古田 鈍舟  
目無猿後を見ない性を持つ  
青森県 五十嵐 操史  
名物も数々ござる暖阿切る  
大和郡山形市 森田 カズエ  
焼鳥にされて成仏できませんか  
大阪市 欄 蘭  
つじつまが合つて酔いが廻り出し  
鳥取市 中森 葉士人  
深刻を羊の顔に描かれる  
大阪市 白石 潔  
公園の外灯口説も聞いてやる  
兵庫県 川井 白峯  
お元日昨日の友が改まり  
七尾市 松高 秀峰  
神棚に年酒忘れたまことなり  
長崎県 村崎 三車  
貧しさを包む見舞いののし袋  
唐津市 田口 虹汀  
めくりたいめくりたくないカレンダー  
浜田市 佐々木 裕  
妻の肩若やく気持が一寸つく  
鳥根県 木村 はじめ

親の喧嘩子の絵日記に訓される  
羽咋市 三宅 ろ亭  
喜怒哀楽の器今日はどれを出す  
岡山市 串田 句味地  
正論をちよつぱり曲げて和に生きる  
岡山市 海納 百川  
病院の夜の長さは良くなつて  
出雲市 板垣 夢酔  
筋道を立てたら普通の祖父だった  
堺市 伏見 茂美  
何にしとこ電話の終りにおかず聞き  
貝塚市 行天 千代  
賀状来ぬ気の抜けた様なお正月  
堺市 片山 敬三  
青りんごかぶり詣でた善光寺  
島根県 山根 峰雪  
殴ったこと今詫びている戦友会  
唐津市 桑原 掬治  
総理より江川の方が騒がれる  
米子市 石垣 花子  
孫ももう番茶も出花と云われ出し  
唐津市 岩崎 実  
時々は見上げよ空ははてしない  
東予市 小山 悠泉  
胸にまだ住む人が居る高島田  
八戸市 島田 英二  
彼も人我も人だと思つたに  
岡山県 岩道 博友  
沈黙でごまかす男の位置に坐す  
唐津市 浜本 義美  
雑談がはずんで焚火灰になり  
山口県 高崎 雀声  
賀状にて健康繁栄祈られる  
山口県 高崎 雀声  
▼投句先 560 豊中市中桜塚三丁目十三の  
十五 橘高薫風





## 近江砂人さんを悼む

橘 高 薫 風

一月十日午後十一時頃、作家の藤沢桓夫先生から電話で近江砂人さんの急逝を聞いた。すぐさま岩井三窓さんに電話をしたら、すでに芦屋の近江邸へかけつけられたとのこと、私は翌日弔問することにした。夫人から急逝時の様子を伺ったが、サイダーをストローで一口飲まれた一瞬に心臓が停止したと云うのである。砂人さんは日頃、健康に対しては誠に用心深く、強い意志で管理されていたのに心臓がそれ程弱るまで医者にも診せず放置されていたのが不審なことに思われる。

昨秋、番傘の七十周年記念の大会を国際ホテルで盛大に開催し、畢生の句集を出版する大企画の主役として成功を収められたことは記憶に新しい。当日、夫人に、大きな事業を二つも片附けられてはとどなされたら身体にも良くありませんから、充分気をつけて下さいと云ったのが事実になってしまった。しがみつくほどのこの世でなかりけり

という句が路郎にあるが、砂人さんもそういう気の弛みがなかったか。長生きには何にもましてその気力が第一に肝要なのである。番傘の大会に於ける幹部同人の発言にも、部外者に番傘の内紛の由々しさを推量させるものが多々あったが、そういうことも砂人さんの精神力を磨り減らしたことだろう。古武士の如く生きてあれと、自己の今後を自ら示唆した言葉もはかないものとなってしまった。砂人さん亡きあと、川柳界にマイナスになるような事態の起らぬよう、番傘の幹部諸氏は自制して戴きたいと願うばかりである。

砂人さんは英国風紳士の貫録と気概があったばかりでなく、作家の風格や匂いも備えておられた。思い遣りも深く、荆妻など私の家に來られる川柳家の中では、砂人さんが一番好きだと口癖に云っていた。瘦せている点では俺もひけをとらぬと云ったら、頭髮の白さが問題にならないと言葉を返されたことも

ある。事業にも川柳にも、番傘と同じ七十才のキャリアが枯淡の味を深めていた。砂人さんの作品については、番傘十二月号に句集の書評を書かせて貰ったのでここでは触れない。古い「川柳雑誌」を見ていたら昭和六年三月号の川柳家の戸籍調に次の様にあった。

近江砂人、姓名、夷佐一。出生地、大阪市。現住所、大阪市東区高麗橋五丁目三三。生年月日、二月十一日紀元節です、年ですが、

年は明治四十一年ごろだったと覚えていますが。職業、会社員。好きな句、売られた三味線に手の届く頃、水府氏、おもわれているとも知らぬ十三四、路郎氏。自信の句、つもりて來ました女小聲なり、飲みなれたウイスキーあり旅恋し。川柳以外の趣味、短歌、ひとり酌む、ひとり歩く。嫌いなもの、茄子の他は食物でも人間でも嫌いはほとんどありません、大抵相当の敬意と好感が持てます。川柳に手を染めた年月、大正も末の頃でした。砂人さんは、死後、益々大きく見える人の一人であろう。ご冥福を祈る。

▼故近江砂人番傘会長の告別式が大阪市生玉町青蓮寺で一月二十二日に盛大におこなわれたが、生々庵、栞、小松園、形水、薫風、岳人諸氏はか本社から参列し合掌。

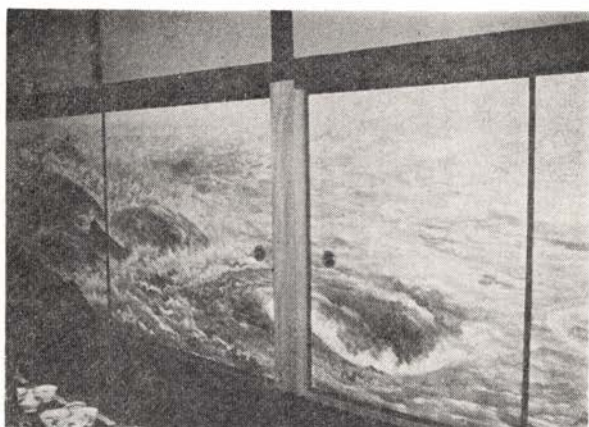
▼二月九日六時から追悼句会が新大阪チサンホテルで開催されたが薫風氏は宿題「めぐり逢い」の選者として出席。



# 玉青先生の襖絵を

## —千福寺に訪ねて—

写真も 阿 萬 萬 的



直原玉青先生には日頃川柳塔の表紙などで色々と御厄介になっている私達は、この度先生の大作である襖絵四間二面で完成されたのを記念に淡路島洲本の千福寺を訪れ見学させていたたくと共に、先生の大坂文化芸術賞受賞の祝賀会が弟子さん達の集いである青玲社の方々の手で催されることを聞き、私達も何とか合流させていただけなものかと思え、生々庵主幹に常任理事会の席で話を持ち掛ける

と、快よく受けて下さり去る一月二十一日一行十名が参加することになりました。  
当日十時十五分なれば発の急行で来ていただいた小松園、形水、水客、紫香、百酒のみなさんと泉佐野から乗った萬的はうまく車内で逢う事が出来たのだが、乗車している筈の寿馬さんが見当たらない。そうこうしている内に電車が深日港に着いて見ると、寿馬さんが前の方で手を振っているのやれやれと云う感じ、改札口を出ると和歌山の女性軍三名（英子、和子、きみさん等）が手を振っておられるので急いで切符を買いて求め、深日海運御自慢の快速船に乗ることにしたのだが……此の日は相当に海が荒れていて飛ぶように走る快速船の船底を叩く波の音の激しさとローリングとピッチングの揺れに乗客みんなの口数が到って少ない。用意のいい寿馬さんのウイスキーポケット瓶も注ぐのがやっとのことに、口に運んでもうまく飲めない状態。  
だがこんな荒れている波頭の白さにも負けじと鳴のながが高く低く、或いは風に流されたりして飛んでいるのがとても印象的に私の眼に映った。

それでも快速と云うだけあって、わずか三〇分でもう洲本に到着、これでは船酔いする暇さえないような次第でした。

波に逆わず鵜が餌をあさる

萬 的

洲本に着いた一行のうち今夜は淡路泊りとし明日ゆつくりと水仙郷をと云う水客、紫香氏、別れた八名は二台のタクシーに分乗して水仙郷に向うことにした。

馥郁とした匂いを放つ水仙の間を縫うて歩くうち、水仙の花言葉は？、などと話し合っているのは女性軍、よう見えて見、花はみな僕の方を向いているよと喋るのは小松園、カメラをパチパチは萬的の仕事……。急ぎ足で園内を廻って待たせてあった自動車のところに帰った時はもう一時を過ぎていたろうか、それから急いでお目当の千福寺に向った。水仙郷の中で逢えるかなと思っていた青玲社の社中の方々とは、とうとう逢えずじまいだったが、帰り道の途中、由良の町あたりですれ違った観光バスの貼り札に青玲社とあるのを見つけた、その窓際の座席にいる生々庵主幹の姿をちらりと見つけることが出来た。しかし

あの人達が帰ってからでないといふ昼食にありつけないのかなと、うんざりしたような声を発するのは男性軍で、どうも品が落ちてしまいう始末。

千福寺で車を降りて門を見上げると、この寺の山号が玉青山千福寺となっているのを見つけた。そして境内には玉青先生の

### 雪山を描いて風を立たしむる

の句碑があり一同はそれに眼をみはった。玄関に立つて案内を乞うと、奥様が出て来られて、先ずお目当ての大広間の四間二面の襖絵「渦」を見せていただき、次々に、「菊」「牡丹」「竹」そして「雪山」の部屋へと案内して下さった。そしてそれ等の絵は全部玉青先生の筆になる墨絵であった。昔、漢の詩人が墨に五つの色ありと説いていたが、此処で見ると墨絵、特に牡丹の絵など墨が色を匂わせて余りある素晴らしいものであった。

### 墨に色ありほかに花の芯匂う 萬 的

玉青先生が何かの本に書いておられた「美術とは、その母体の人間の心がまず美であって職業画家になっても営利を求めるようになれば、もうおしまいだ」と云うより醜術と云いたい」と記されておられた。此の大作を眼の前にして私はその感じを一層深くするひとりとて立ち止まっていた。

出された茶菓子はみんな空っぽ、お茶も何回かおかわりをし、五時半になったが、まだ青玲社社中の方々は姿を見せたくない。お腹の方は気取らずぐうぐう鳴る始末……。

しかし四時近くになってみなさんが到着す

ると急に寺内が賑やかになった。そして私達川柳の連中は牡丹の間に納まって次々に運ばれる料理に舌鼓を打って賑やかに話し合っている。玉青先生がわざわざ私達の部屋まで来られて下座から御挨拶をされたので私達は全くとて恐縮の至りでした。

話はずみ、声がだんだん高くなって来た頃、外はとつぷりと陽が落ちてくるのに気づいた。水客と紫香さんがこれから宿の方へ行かねばと席を立ったのはこれこれ五時半頃だ

から新聞路淡  
付25日1月54年昭和

## 「川柳塔」(大阪)

(塩田出身の大坂形水氏ら)

「川柳塔」(大阪)の同人十氏が、二十一日(日)午前十時十五分大阪ナンバ発、正午に洲本に着き、水仙郷で花を見物、午後二時洲本市の千福寺に着いた。一行の中には、津名町塩田出身、オースケ社社長の大坂形水氏、洲本出身の阿萬萬氏の加わっていたので、記者は約一時間半、大坂氏ら川柳塔の人々と四方山話をした。

本紙一月一日号の大坂氏の「塩屋の浜の思い出」は「創作やなうで、六十五年前の、ホンマのことやねん。」……さらに、「以前、塩田の谷さんの一代記みたいな人が、淡路新聞に載ってた。盲のオトツツアンが岩と岩

つたろうか。とも角、川柳を作らなくてもいい川柳人の旅は何と云っても肩がこらなくていいなあ……とは誰だつたかの声だつたが、皆さんも十分共鳴しているようだった。

さてお開きの時間が近づいたので、大阪市内と西宮へ帰られる小松園、形水、百酒、寿馬氏等は青玲社の方々と同じバスで帰られるとの事で、私は女性軍に囲まれて、洲本港六時発の船に急いだ。

(カッとは玉青先生の大作「渦」)

## の一行

玉青画伯の襖絵など鑑賞

の間い足はさまれるとこ、読んで涙が出た。ワシより、だいぶん上やが、お元氣やろか」と語った。

阿萬氏は「ウチの先祖の墓、洲本の青羅寺にあるんや。川柳塔のグループで、よう旅行するが、趣味の仲間はいえもんやで、古里の淡路へ案内してよかった」と。一行は中島生々庵主幹、榎谷寿馬、黒川紫香、島居百酒、菊沢小松園氏ら。同寺の四間二面という直原玉青画伯の海の襖絵や、アルプスの絵を鑑賞。同画伯を囲む会の一行と同三時半、同寺で合流し、同画伯の大阪文化、芸術賞受賞の祝賀と新年会を兼ねた宴会を開いた。



雛壇

高橋幸代選

親と子が組み立てている雛の壇  
雛壇を飾って嫁の座をひろげ  
雛壇に並べたいよな器量よし  
雛壇に背伸びしている母の愛  
結局は雛壇月賦で買うとする  
雛壇は見るだけにしたいぬいぐるみ  
デパートの雛に踏み切りつかぬ顔  
気がつくと孫雛壇に乗っており  
雛壇のあらがいつの間にか減り  
雛壇を今年も飾りまだ嫁かず  
雛壇に母の手製の雛もそえ  
定年も降職もなし内裏雛  
雛壇から抜け出たような愛らしさ  
雛壇を賞めて値踏みをする近所  
雛壇のルーツしみじみ想う宵  
雛壇に母系家族が光る春  
雛壇の雛にも役がある序列  
雛壇に亡き娘の人数並んでる  
雛壇が派手に飾れる部屋が夢  
ヒナ飾の主役は祖母のものとされ  
雛壇のボンボリ淡く母を待つ

早苗 句味地 ハルエ 勝美 春日 一人 無 佳雲 素身郎 ひろ坊 勝一 枯梢 千子 代仕男 三車 隆子 悠優 休泉 虎秋 軒太楼 虹汀

雛壇の前で三代打ち集い  
雛壇の夢をみている選挙カー  
雛壇へ立つ式服を借りて来る  
雛壇の紅一点がよく喋べる  
雛壇は知るまい人間の騙し合い  
雛壇に栄転と左遷坐らされ  
雛壇の何処へ私は坐ろうか  
雛壇のひな逝った子にどこか似る  
雛壇に並び汚職のにおいする  
素身郎

行有 武水 博友 白李 刀水 芳仙 一路 洋々 素身郎

雛壇の朱に倅せが敷いてある  
雛壇へ孫怪獣ものせにくる  
雛壇へ指図の老母がいてくれる  
雛壇を前に孫との対話あり  
雛壇のような団地の暮らしの灯  
人

宵明 カズエ 里風 敬三 どんたく

雛壇の内裏が話す京言葉  
妊った嫁と雛壇下見する  
雪洞が点くと雛たち喋り出す  
天 道句

綾女 置重 ひろ坊

陽光

川端柳子選

陽光が見付けてくれた小さい穴  
陽光へ脱ぐ気になったちゃんこ  
陽光に笹舟子らの夢を乗せ  
陽光の中で取越し苦労する  
勤労の汗へ陽光惜しみなく  
陽光に誘われ花が喋り出す  
陽光を受け富士山の晴れ姿  
どん底の生活に春の陽がまとも  
陽光の中にねむたい無人駅  
陽光に花の冗舌聞いて暮れ  
残雪と春の日差しがする会話  
窓越しに陽光春の音を立て  
陽光に野仏さまも笑み給い  
陽光の一刷毛桃の花染まる  
いちばん偉いものに陽光みえてくる  
陽光に長患いの床も替え  
年金の背中にもある初日の出  
陽光が小川の底まで温める  
陽光をうけてリュウクの鈴の音  
旅立ちの朝陽光のやさしかり  
陽光へ生きたし生きる幸を知り  
休憩へ陽光むさぼる地下の職  
木洩れ陽も当らぬままの小企業  
陽光に翳す掌の血が炎えている  
陽光をまとも拝めぬ身の汚れ  
陽光が拝めず日照権でもめ  
左遷地へ来ても陽光身に温い  
路地裏で陽光を待つ植木鉢

伊津志 登美也 彩平 古方 軒太楼 一路 方大 三車 佳雲 大柏 寿馬 奇童 勝美 優 古方 本蔭棒 枯梢 里風 木魚 静泉 秀峰 道子 ひろ坊 規不風 七面山 博友 善四郎

春の陽光もしまいこんでるコンバクト  
カズエ  
陽光に遠く下積堪えている  
白李  
合格は笑顔陽光浴びてくる  
ろ亭  
堅道を抜けると陽光が待ち  
刀水  
一粒の種陽光を待つ望み  
重人

陽光に風が動いてみとうなり  
可住  
陽を浴びて皆極楽に行ける顔  
宵明  
陽光を待つ球根の芽が動く  
虎秋  
陽光に力尽きたる霜柱  
掬治  
陽光がベッドの松葉杖を呼び  
句味地

病窓へ春の陽ざしの私語を聞く  
奇童

陽光へ翼を閉じたまま二浪  
茶人

日向ぼこ貧しいことは口にせず  
宵明

陽光を信じる足のまっしぐら  
軸

女

太田 良子 選

ロマンスを抱いた女は振り向かず  
多賀子  
女客ダイヤの指を上組み  
登美也

バーゲンの女の腕のたくましさ  
虎秋  
不景気を嘆く女のくすり指  
白李  
父の目に母は女に見えぬらし  
敬三  
ビヤガーデン女のグラス見つめられ  
古方  
髪を長く描いても女になつてこず  
早苗  
核心に触れて女が背をむける  
素身郎  
女一人ゆえに噂に尾ひれつく  
佳雲  
コンバクト叩いて女身構える  
越子  
繕った女の過去が破けそう  
善四郎  
振り袖で女の歩巾もどる初春  
どんたく  
女の子見様見まねで母代理  
保女  
コンバクト開いて女にある嫉妬  
ハイミスの意地は女を意識せず  
洋々  
女の目女のアラをすぐ見付け  
翁童  
幸せは女髪形変えてみる  
重人  
女らし娘のしぐさにちと慌て  
里風  
残しものばかりを食べて健母です  
近郊  
婆ぬきで嫁いだお仁もお婆さま  
弘朗  
OLの女に変わる退社ベル  
悠泉  
一泊のムードに女の方がする  
彩平  
別れ話へ女の意地が妥協せず  
宵明  
看護婦も女非番は赤い服  
義美  
ときめきを三面鏡が受け止める  
ひろ坊  
只呉れる列へ並ぶのも女  
実  
やせること願う女のつまみ喰い  
耕草  
老妻が娘におしやれすめられ  
七面山  
女から女へ誇張さる噂

川柳わかやま百号記念

句文集「あおい海」

おかげさまで売り切れました。ありがとうございます。  
とうございました。

野村 太茂津

川柳塔のバックナンバー（一冊百円。  
但し三カ月前の分から三十円）売り切れ  
たのもありますので、お問い合せくだ  
さい。

女だけの会で女は物足らず 無人

前借でブーツ履きたいのも若さ 曉明  
目出度くはあるが三人目も女 本蔭樺  
女一人夜を味方にして稼ぎ 岩光  
ホステスの休日甘い顔はない 規不風  
一食をぬいても女化粧する 方大

エプロンに女の意地の裾が利く 裕

執念の女は可愛い嘘つけぬ 善彦

ワンテンポおいて女だと気づき カズエ

嫁すまでのお茶やお花や美容術



# 初歩教室

題―「漕」―

本田恵二朗

全力投球という野球用語があるが、積極的とか、前向きの姿勢とか、ファイトなどの意味を表現する語として、色々な場面に用いられていることは誰れも先刻ご承知のことである。作句態度も全力投球であらねばならぬと云いたいで引用した次第であるが、全力投球と云えども直球とフォアボールとデッドボールとしか知らないとあつては佳句は生み出せない。直球にも速球と緩球があるはずだし、時には変化球も用いるテクニクを会得したものだと思ふ。だが変化球と云えどもストライクにならねば佳句とは云えない。ボールになった変化球的な句は、感動を呼ばないばかりか、意味が解釈出来ないほどの変化的な句を見ることが往々にしてある。ストライクの句を放つて欲しいと祈ることしきりだ。

水漕の泳ぐ金魚に恋を見た

(水漕の金魚の恋を乱すまい)

水漕に墜ちた三日月は拾わない  
(水漕に墜ちて三日月浮き沈み)

観 洋

同

(水漕に墜ちた三日月凍えそう)  
はて知らぬ不況へ夫船を漕ぐ

(はて知れぬ不況へ夫船を漕ぐ)

漕き方がうまいので絵や詩が生れ

(漕き方のうまさ絵になり詩になり)

急流に流されぬ櫓を妻と漕ぐ

(急流へ夫婦で握りしめる櫓)

流されるものか漕ぐ手を休めまい

漕着の港に迷う原子船

(原子船漕ぎ着く港見つからず)

漕き出した大平丸も多事多難

(漕き出した大平丸へ波高く)

青春のオール母校を賭けて漕ぐ

櫓で漕ぐペーロン伝統くずさない

(伝統の誇りペーロン櫓で漕ぐ)

漕ぐ手やめ夕焼け眺めてる二人

(夕焼けが恋のオールの頬を染め)

沖へ漕ぐボートに秘めた二人の仲

(沖へ漕ぐオールに秘めた二人仲)

漕き出した小さいボートで頼り小さ過ぎ

(漕き出した小さいボートのあわれ小さ過ぎ)

漕き出したけれど波にはさからわらず

(ペーランのオールは波にさからわらず)

極楽の夢を漕ぐ老婆日向縁

(極楽の夢を漕いでる日向縁)

初夢は七福神の夢を漕ぐ

(初夢へ七福神が漕いで来る)

再起する逆風漕いだだ根性

(逆風を漕ぎ抜き再起の灯を見つけ)

不況風父漕ぐ船を進ませず

(父の老いた櫓をあざ笑う不況風)

刀 水

同

美智子

同

栄

同

小雅子

同

敬 三

伊勢吉

佐代子

同

善四郎

同

静 佳

逆風へ漕き出す二挺の櫓が揃い  
四苦八苦漕いだ櫓が糧となり

(父一杯で船を漕ぐ父の老い)

母を待つブランコを漕ぐ土を蔵る

(ブランコを漕ぎ漕ぎ鍵っ子母を待ち)

漕いでいるわりに進まぬ妻の舵

漕いでいる足腰誰れも見てくれず

(漕いでいる足腰老いの影が追う)

なぐられて心で漕いだ頃憶う

固すぎる講習です船を漕ぐ

(むつかしい講義に船を漕がされる)

人生の荒波を漕ぐ細い腕

(漕ぎ抜けた細腕波に見直され)

漕き出したボートの中でのいい話

(波静かボート漕ぎ漕ぎプロポーズ)

正座しているから居眠りうまく漕げ

(正座してゆうゆう船漕ぐ芸を持ち)

漕ぎ抜いた自信が大ききものを言い

(コックスの妻に逝かれて一人漕ぐ)

人生の海原を漕ぐオール朽ち

(果て知れぬ人生航路へ漕ぎ疲れ)

午前様待ちくたぶれて船を漕ぎ

四海波静か漕き出す夫婦船

(波静か四海に漕き出す夫婦船)

青春の命を賭けてオール漕ぐ

人生の船旅漕ぎ手などおらぬ

(人生の船路へオールの重たい日)

舟漕いで窓ぎわの日が終り

句昧地

同

三 和

同

無 人

同

保 夫

同

頼 次

同

三 男

同

利 美

同

翁 童

(窓ぎわの陽が舟を漕げ漕げと云う)  
暗礁が漕ぎ手の疲れを見逃がさず  
漕ぎつけてみれば後園砂上なる

公子

(蜃気楼を知らずに漕ぎつける)  
急流をあやつる竿は生きている  
夫婦船漕ぐ手ゆるめる子の果立ち

紀久子

子の帰り待ちつつコタツで舟を漕ぐ  
(子の帰りコタツで舟を漕いで待ち)  
妻の舵ひたすら夫漕がされる

柳五郎

オールさばき元海軍の腕の冴え  
(オールさばき元海軍のさすがなり)  
腕に燃りかけて漕ぎ出す初船出

露杖

順風満帆漕ぎ手の心なまりそう  
一次二次どつと漕ぎ出す受駟丸  
泥舟を漕ぎ漕ぎ彼岸に迫りつき

同同

## 同人吟・御投句御礼

西尾 栞

昨年四月に選が廻ってきた時に、私の選の方針というか、抱負というか、そういったものを書かねばならなかったのに、今月で終るようになって、編集部の要請がありましたので一言書いて見ようと思います。

それは巻頭句のことです。曾て、松江支部の五、六氏が「巻頭を剪る」という言葉で以て、我が塔社の巻頭句を組上にあげて色々批評をされ、談論風発、誠に活発なご意見を交わされたのでありますが、その後松江誌の発刊も遅れ勝となり、誠に淋しい思い

浮世の波漕ぎ抜けて鋭光る  
(漕ぎ抜けて浮世の鋭に笑ひそめ)  
祝福をされて新婚漕ぎ出しぬ

三十四

結婚も芽出度く荒波漕ぐ覚悟  
漕ぐ夫に命あずけて海もぐる  
長寿の岸めざして老いの櫂さばく

御前

漕ぎ出せば風が風が湧いてくる  
不器用で処生の波を漕ぎきれず  
目指す灯へ漕がねばならぬ海暗く

幸

さざ波へ恋のオールが春を呼ぶ  
二人して漕ぎ出す船路果てもなく  
(新しい船出へ揃う櫂二つ)

同同

妻に舵あずけひたすら漕ぎ続け  
ボート漕ぐ両手に愛が満ちている  
静泉

同同

でありましたが、この頃榎谷寿馬氏の勉強教室に於て又々巻頭吟に対する批判鑑賞を試みられて大いに勉強されようとしておられることは洵に喜ばしい事でございます。

この巻頭吟というものは、いずこの柳誌又又俳誌に於きましても最重要の吟詠でありまして、言わばその雑誌の正面切つてのマスクであります。この巻頭吟、一つを読むことによつてその雑誌の内容が決定されるのであります。その巻頭吟に於ては、巻頭句の五句又は六句が、何れも遜色なく揃っているということでありまして、一句だけ二句だけ素晴らしい句でありましても巻頭吟として採るわけにはゆかないのであります。ここが選者としての頭の痛いところであります。

(オール持つ両手にうぶな愛満ちる)  
大海へ漕ぎ出す子の夢あたためる  
(漕ぎいだす子の夢親の夢はずむ)  
お梔舟漕いで出世を試みる

静枝

(お梔舟出世の海に漕ぎ着ける)  
家庭の和漕ぐにない手は母であり  
(茶の間船母は笑顔で漕ぎ続け)

同

驚鷺も二羽で漕ぐからサマ一枚  
三十年漕いで来た手に紙一枚  
式挙げた日から漕ぎ手にくる責任

同同

(式挙げた日から漕ぐ手に力込め)  
題一ロマンズ 3月20日締切(5月号発表)  
宛名 岡山県倉敷市下津井一八九三四

同同

曾て俳人A氏とこの巻頭句について話をしたことがあります。A氏曰ク「四句迄揃っているのに、あとの一句がどうしても採れない句があった時に、私はその投句者にあとの一句を再投句をしてもらつて、巻頭句としたことがある」ということを聞きました。幸い私の場合は、その苦勞もなくこの一年立派な巻頭吟を飾つて過したことを感謝致します。今後共の御健吟を祈ると共に、この一年間の真執な御投句に対して厚く御礼申し上げます。

本田 恵二朗

若本 多久志 著

川柳句集「続・老いの坂」

54年6月発行の予定

大 萬 川 柳

「これから」

入選発表

選 者 川 村 好 郎  
投句総数 三百七十五句  
入 選 六 十 一 句

大 阪 幸 子  
これから他人あつまり判を捺す  
大 阪 小 松 園  
これから女の出方だけ頼り  
尼 崎 利 美  
これからが始末に負えぬ泣き上戸  
富田林 優  
これから妻のアルバム児が主役  
米 子 千 代  
急坂を見上げて杖に祈りこめ  
岡 山 たけ志  
これから考えないで酒にする  
堺 一二三  
老いの身へまだこれからの鞭を打つ  
熊 本 芳 仙  
これからは吞まぬと決めた酒に酔い  
富田林 花 梢  
これからの話は傷を深くする  
鳥 取 弘 朗  
マイホームさてこれらが案ぜられ  
和歌山 頼 次

これからと見上げた空の陽がまぶし  
堺 ミツエ  
これからの夢は宇宙に賭ける子等  
和歌山 和 子  
裸木はこれから先の意気を溜め  
岡 山 静 佳  
これからは好い姑になる白を着る  
和歌山 幸 子  
肩書を得てこれからのドラマ組む  
大 阪 真 砂  
これからを見守る無償の母の愛  
藤井寺 吸 江  
これからはもう迷うまい子の寝顔  
大 阪 満 津 子  
これからの夢がまだある髪を染め  
和歌山 寿 子  
やがて春これから愛の彩となる  
大 阪 秀 村  
これからの愛を指輪に誓い合い  
尼 崎 千 子  
これからは孝行しますも聞きあきる

大 阪 一 栄  
これからはそう致します嫁素直  
大 阪 柳 志  
これからのペンが重たい直木賞  
大 阪 蘭  
先ず無料これから金の要る手相  
八 尾 美 幸  
これからを見つめる男の太い眉  
米 子 雄 々  
茶柱へこれから期待するドラマ  
名古屋 枯 梢  
大器晚成これからですと齡をとり  
橋 本 天 彦  
これからの本番金のいる話  
今 治 佳 雲  
定年へ子はこれからという育ち  
倉 敷 里 風  
これからの余世へ磨くちびた靴  
宝 塚 紅 扇  
これからは絶対しないという無心  
大 阪 小 雅 子  
これからは悠々自適古稀の春  
三 重 冬 花  
これからとこれからという夢を追  
大 阪 君 子  
これからの葉にしますと恥じもせず  
これからの勝負と三浪悔いていず  
大 洲 暁 明  
二次会でこれから本音吐かす吐  
これからは後にひけない二次試験  
和歌山 英 子

これからへ二十才のお神酒ひき締める  
内職の針これからを思索する  
東 大 阪 美 子  
これからに賭けて過去など振り向かぬ  
これからの生き抜く覚悟でぬぐ喪服  
大 阪 道 子  
これからの話は声を小さくする  
これからの託す子供は個人主義  
大 阪 弘 生  
五十路まだこれからでもと思う気も  
これからの人の訃報に決られる  
交 野 茂 児  
これからはパパなんですと励まされ  
これからのが余生と云えぬ退社の日  
神 戸 しんたく  
これからやないかと二次会はなさない  
直白い成人式の画布へ立ち  
京 都 笑 風  
これからの励ます父と子の会話  
これからのを賭ける男へ発車ベル  
鳥 根 早 苗  
これからの余世へサイコロどうころふ  
坂くだる齡これから杖握る  
佳 句  
堺 邦 晴  
これからも友達でねと軽く逃げ  
岡 山 金 太 郎  
つまりいた石にこれからを誓わされ  
和歌山 三 男  
これからという人だった通夜の席  
和歌山 寿 子



思慕の海へこれから船出する女

定年のこれから被る面を撰る  
倉敷里風

人の句

堀 邦 晴

定年のこれから生きる軽い椅子

地ノ句

八尾 美 幸

産院の廊下でこれから考える

天ノ句

西宮 百 酒

これからへ賭ける八起きの眉皺し

選考吟

炎える口づけこれからを考えず

昭和五十四年度

ベストテン（二月現在）

一 美 幸

二 優 子

三 百 酒

四 寿 子

五 八尾

六 富田林

七 西宮

八 和歌山

九 裕 里

一〇 真 砂

一一 金太郎

一二 文 秋

一三 花 梢

一四 弘 生

一五 早 晴

一六 苗 子

一七 道 子

一八 邦 晴

一九 八 尾

二〇 西宮

二一 和歌山

二二 裕 里

二三 真 砂

二四 金太郎

二五 文 秋

二六 花 梢

二七 弘 生

四〇 富田林

三五 大 阪

三〇 堀 邦 晴

二五 倉敷

二〇 大 阪

一五 大 阪

一〇 大 阪

〇五 大 阪

〇〇 大 阪

〇五 大 阪

〇〇 大 阪

〇五 大 阪

〇〇 大 阪

〇五 大 阪

〇〇 大 阪

〇五 大 阪

〇〇 大 阪

〇五 大 阪

〇〇 大 阪

〇五 大 阪

〇〇 大 阪

〇五 大 阪

〇〇 大 阪

〇五 大 阪

〇〇 大 阪

〇五 大 阪

〇〇 大 阪

〇五 大 阪

〇〇 大 阪

〇五 大 阪

〇〇 大 阪

〇五 大 阪

〇〇 大 阪

昭和五十四年度第四回

「ゆとり」

三句以内

三月廿五日

締切

第五回

「誤算」

三句以内

四月廿五日

締切

投句先

堺市堀上緑町一ノ三ノ七

藤井一二三

大 萬 川 柳 係

以下略

課 題

「水」

規定

提出句

二句一各題共未発表のもの

締切

五十四年三月二十日

送り先

伊丹市西野外川原11

70 榎谷 寿馬宛

発表

川柳塔勉強室会報

（No.10予定）

用紙

官製ハガキ一枚に四句記載

選衡

無記名、清記選

賞品

各題共秀句一句、佳作五句

粗賞進呈

御参加下さい）一 告

川柳塔誌を合本しませんか

一冊ずつにしておくや散逸する愛があります

合本の背にあなたの雅号を入れて三千

円ほど出来ます。

課 題

「椅子」

川村 好郎選

締切

三月十日

投稿先

大阪市東区馬場町

NHK近畿本部「老後をたのしく」

係

発表

三月二十四日（土）午前九時十五分

ラジオ第一放送（全国放送）

「老後をたのしく」の時間

▼竹内久祐著・川柳・俳句・随筆集「会瀬の青藍」（千七百円）が、日立製作所・日立工場日立会「ばんばん」編集部から発刊された。著者は東大工学部冶金学科卒業の工学博士で本誌「水煙抄」へも投句、またはエッセイを発表されたこともある。（筆名紫鏑）序文は橋高薫風氏。

▼渡航歴コーヒープレークを宣す

「詩上競吟」 川柳塔勉強室

「愛染帖誕生四周年記念

「詩上競吟」 川柳塔勉強室

「詩上競吟」 川柳塔勉強室

「詩上競吟」 川柳塔勉強室

「詩上競吟」 川柳塔勉強室

「詩上競吟」 川柳塔勉強室

「詩上競吟」 川柳塔勉強室

「詩上競吟」 川柳塔勉強室

「詩上競吟」 川柳塔勉強室

「詩上競吟」 川柳塔勉強室



# 柳界展望

(原稿締切毎月末)

▼川柳塔社新春役員懇親宴が一月二十八日午後二時から心齋橋・大成閣の五階大広間で開かれ生々庵主幹以下三十二名出席。本年度の活躍を誓い合った。

▼53年度川柳たけはら賞(第一回)は最優秀「春とろり筆天平の彩を選ぶ」大島紫光「優秀一席」人ひとり福島如風「同二席」転んでも転んでも鬼起きてくる小

## 新同人紹介

おお ばやし か  
大林 曲 手  
一葉・鬼遊・推薦

うめ もと と み や  
梅 本 登 美 也  
一緑之助・独仙・明朗・推薦

島蘭幸

▼清水美江氏(埼玉川柳社主幹)は昨年12月19日逝去し84歳。「川雅」時代には「寄稿ねがったこともある」

▼岐阜川柳社「柳宴」会長野口北羊氏の急逝のため、記念川柳大会は中止になった。同誌主幹は田中明二氏。発行人は野口初枝氏。

▼増井不二也氏(ふあうすと川柳社)夫人千代香さんが一月二十日午後七時三十分心不全で逝去。二十二日午後二時から神福寺で告別式がおこなわれ、本社から西尾葉、橋高薫風氏ほかが参列された。合掌。

▼同人の動向△

▼西尾葉氏(八尾市)は四国の旅の団長、各社の記念

川柳大会の選者など、目下

大わらわというところ。

▼尼緑之助氏(出雲市)から53年度の「いずも賞」作品は「農政の虚実の間に付つ案山子」門脇瓶底氏で賞句会は盛会でした。一干支六回別に変わりもなく元旦一緑之助。

▼大坂形水氏(大坂市)は1月1日発行の淡路新聞へ「塩屋の涙の思い出」(随筆)を執筆。氏の少年時代をしのぶ佳篇である。

▼横地雅風氏(大坂市)は昨年十一月三日の文化の日に勲六等瑞宝章を受賞された。盲導犬の普及、全国指名手配のコンピュータ化その他警察畑の功績によるもの。

▼大塚豊生氏(鳥取市)は十二月二十一日鳥取市立病院へ救急車で入院された。ご全快の一日も早いことを祈ります。(日瀧氏報)

▼里小路氏(寝屋川市)が故岸南柳氏の後を継ぎ「駒つなぎ」の代表として活躍されることになった。

▼森井清居氏(竹原市)から「本職の簡易保険は本年も最高優勝者になり、更に国際優選奨にもランクされ

ました。

▼隠岐不酔氏(姫路市)が沖繩から一妻と旅行するのはこんどが初めてです。一結婚に始めて妻と沖繩へ一不酔。

## ▽3月の句会△

▼葉の花句会は十日(土)六時から西郷会館(八尾神社境内)近鉄大阪線八尾下車西南へ歩約三分。会費三百円。兼題及び選者一緑(葉) 急ぐ(酔々) 猫(美幸) 責任(未定) 席題二題(兼席題とも各題五句以内) 投句各一句毎適当な句箋に記入、裏面に雅号記名、郵券百円同封、締切は当日到着分限り、投句先T581八尾市高安町北一の二五八路美幸宛。

▼南海川柳会は十五日六時から南海電鉄本社食堂内で開催。題は「盛り場・友情」落し穴。

▼大阪川柳会は二十日午後六時から松崎町三丁目大萬で開催。題は「現実・言い過ぎ」楽天家・プラン。

▼東大阪川柳同好会は二十四日(土)柳から東大阪市中心公民館2F(近鉄の永和駅前)題は「狙う・古日発表。席題二題当日発表。

▼奈良番傘新年並びに松田宇宙太川柳塔同人昇格祝賀句会(1月21日)から寄せ書拝受。番傘、川柳塔同人諸氏の雅号が賑やか。

七日 午後六時

中村ゆきを選

花柳 惠美子 百酒 古方 綾女 鬼遊 規不風 柳宏子 洋敏  
 広告に咲かない花が咲いている  
 ウフフと笑って広告になっている  
 机一つが大大的に広告し  
 水虫の効き目広告でまた迷い  
 洒落た紙バッグ私をPR  
 主婦の勘広告間違いないという  
 広告に教育ママがまどわされ  
 広告に胃の弱いのがおどかされ  
 広告を出した事ない老舗です  
 ありそうもない広告にひっかかり  
 広告も載せ倒産の記事も載り

只 爲「 爲 了 你 們 好 ！ 」

中田たつお選

弱虫の武器はせつせと金を貯

○谷 賢

つ  
お  
選

信治

雅 國

弱虫の退屈いくさ考える

豆虫の一生をつた怪い骨

弱虫の一人が、た車いす

兼題「無礼」

上役とお通夜のような無

酒は重宝無礼の罪をみな

無礼講炭坑節は生きてい

無礼だが憎めぬ奴で聞き

無礼講だんだん馬鹿な咀

オクターブ下げたら無効

日雇で無礼も腕も耐えさ

声かけて見下ろしている

幸

たつ

六

激雀選

静  
里

軒太

一、

トメ子

紫禾

古

雅國

重



先生をオマエと呼ばす革命歌

無礼打ちしたい女房に養われ  
おおきにも言わず煙草と釣を置き  
茶目ッ気があるから無礼許される

階段の下から素足の白き追う  
御無礼は承知予告なしに来る  
公園の闇無礼な眼が光る

無礼講上司が居ない酒の味  
安萬侶の墓とは知らず茶の香り  
窓口の男役所を濡にさる

この頃の若い者はという無礼  
鼻毛抜くこれを無礼と女いう  
なれっこになって無礼に動じない

無礼なるお客と思うバカになる  
店員の無礼身なりを見くびられ  
一年の無礼を賀状にわびてくる

無礼だと思えど相手が強すぎる  
美人ならこんな無礼も許される  
無礼打ち昔はそれが出来たのに

権力の仮面が無礼な口を利く  
無礼講そんな言葉に甘えてる  
無礼講下戸に心を盗まれる

無礼な手が鳴らし続ける神の鈴  
女房の無礼を養子として耐える  
現金でご無礼ですとは有り難し

困窮が笑って呉れている無礼

兼題「横」

美幸氏代通

神谷凡九郎選

横向いた時に涙は隠せない

その時は善人だった横になる

横にある弁当箱は空である

たつお

洋敏

ゆき彦

鎮彦

小松園

寿界

涼一

信治

信治

岳人

信治

栗

千乃子

恒明

花梢

たつお

潮花

吸江

度

小松園

弘生

勝美

みずほ

水客

洋敏

生々庵

滋雀

小松園

勝美

岳人

出席―与呂志・滋雀・勝美・敏・

百酒・喜美子・雅風・重人・水客・

右近・形水・花梢・潮花・夕花・千

万子・茂美・蘭・惠美子・小路・恒

明・萬的・一三夫・紫香・飄太・英

子・幸・弘生・太茂津・みずほ・頂

留子・生々庵・恭太・文秋・トメ子

・一二三・あいき・吸江・好郎・柳

伸（柳信改め）川狂子・規不郎・栗

・庸佑・涼一・鬼遊・雀踊子・薫風

・酔々・鎮彦・凡九郎・小松園・亜

成・亜鈍・与史・柳宏子・綾女・古

方・洋敏・喜風・信治・君子・寿界

・寿子・定男・誓二・岳人・たつお

・葉子。

横向いてもう一押しを待つ女

横車愛の変形とは知らず

横向いたふくれ面にある魅力

石焼羊歌劇の横で腰据える

観音さまの横で色気を見る男

許りの顔は横から盗まれる

異邦児の横に遮るものが無い

銀行の横の暗さで花を売る

胡魔化されはせぬ横顔深く読み

急がば回れ横道猶つかえ

過去の女は紙を横に裂く

失恋の女は紙を横に裂く

横車押す手がゆるむ老夫いとし

横這いのグラスへ靴をすりへらす

大阪の乞食横文字よんていた

立たずともいいのに横の女立つ

好郎

あいき

ベ女

静馬

太茂津

みずほ

亜鈍

水客

太茂津

柳宏子

柳宏子

みずほ

滋雀

柳宏子

喜美子

柳宏子

敏

紫香

何を選んでいたぐくか

は先様におねがいして

タカシマヤの商品券を

お贈りするのにも心に

くい贈物かと存じます

一〇〇〇円から

一〇〇〇〇円迄

大阪・東京・京都

3店に共通です

高島屋

高島屋

高島屋

高島屋

高島屋

高島屋

高島屋

高島屋

高島屋

高島屋

高島屋

高島屋

高島屋

高島屋

高島屋

高島屋

高島屋

高島屋

高島屋

高島屋

高島屋

高島屋

高島屋

春めいてきたから突如旅に出る  
 突如来た母に何もかもわかり  
 勝運を突如くずしたミス一つ  
 突如泣く女の酔いをもて余し  
 レントゲン突如眩暈に襲われる  
 冗談のはずが突如として泣かれ  
 わらべ咽突如亡母が恋しなり  
 良心が突如疼いたノド仏  
 反抗期突如叫んで軽くなる  
 不意に行く喜ぶ顔が見たいから  
 子を庇う妻突如として弓を引く  
 金づるが突如引退ほのめかし  
 窓際が突如大きなあくびする  
 楽園で突如つめたい風に出う  
 悲しみは突如斜につき抜ける  
 その人が突如現われ潤く舌  
 突如きた友のやつれを知る痛み  
 突如来て女の素顔見えてしまい  
 回りとは知らず北風突如吹く  
 いたずらな風は女を慌てさせ  
 狼に突如なりたいた女という  
 不景気に突如変った社の方針  
 密約が突如どこかで洩れてくる  
 方向音痴の背中が突如寒くなる  
 突如吹く風がユーモア乗せてくる  
 ポツクリと死んで仕合わせかも知れぬ

兼題「迷路」

大坂

形水選

洋敏 庸佑 鎮彦 萬治 信子 千子 夕花 重人 君人 恭太 英子 トメ子 葵 夕花 与志 百酒 花梢 形水 岳人 鬼遊 滋雀 敏 涼彦 鎮彦 定男 雀踊子 静馬 枯梢

迷路だど気づくに暇がかかり過ぎ  
 青い鳥追うて迷路で見失ない  
 迷路のような露路に人情満ちていた  
 釜が崎迷路を歩く妻揚枝  
 出口があるらしい迷路風がある  
 だまされ上手な女迷路をうまく抜け  
 ある迷路春の聖書が落ちている  
 どのページあけても迷路の地図がない  
 人生の迷路で仏の顔にあう  
 地下街の出口に迷路を抜けた空  
 球界の迷路を江川知らぬまま  
 迷路にならぬように死者へ火をともし  
 中年の迷路へ重い靴をはく  
 子には子の迷路矢印残すまい  
 細胞のひとつふ迷路に突き当る  
 港街迷路の女春を売る  
 転落の詩を迷路の隅で書く  
 踏み込んだ迷路で数珠を持つ安堵  
 警察犬も迷路で迷いペソをかく  
 玉の井の迷路荷風の杖の音  
 城下町の迷路忍者の匂いする  
 臆病な男迷路の奥に棲む  
 迷路から出て安寓はほつとする  
 片肺の男迷路で息が切れ  
 禁じられた遊びで迷路に足を入れ  
 母の声迷路で五線符にのせる  
 欲すてた顔へ迷路の陽があたる  
 カナリヤの記憶を戻すある迷路  
 迷路にも決して慌てぬ白い杖  
 神様が消える迷路の中ほどで  
 エスカレーターに乗ると迷路に運ばれる

軒太楼 一栄 柳宏子 みずは 雀踊子 萬治 寿界 一三夫 萬治 一三夫 好郎 信治 君人 涼彦 涼彦 信治 岳人 花梢 一三 一三 寿界 醉々 形水

|                                               |                                                                      |                                                                       |                                                                                                                                                                                                                                                                     |                                                                                                                                                                                                     |                                                                                              |
|-----------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>川柳天守閣創立45年 記念大会<br/>         久保田以兆句碑建立</p> | <p>日時 昭和五十四年三月二十一日（祝）<br/>         午後二時開場<br/>         句会終了五時三十分</p> | <p>会場 大阪市立労働会館 三階集会室<br/>         （国鉄環状線、地下鉄「森の宮」駅下車西へ二ツ目の辻南入る西側）</p> | <p>会費 千円（呈、記念品、天守閣誌三月号、及大会発表誌）<br/>         兼題 「時事雑誌」「セクス」「築」「前進」「春」「相伴」「長」「詩」「人」「い」<br/>         永田 帆船 選<br/>         三条 東洋樹 選<br/>         田中 桂太楼 選<br/>         増井 不二也 選<br/>         川俣 喜狼 選<br/>         西尾 梨 選<br/>         久保田以兆 選<br/>         （雅号イロハ順）</p> | <p>各題二句宛。出句締め切り午後三時。席題無し。欠席投句は御遠慮下さい。懇親宴 同所五階和室広間六時より。会費 費 二千元<br/>         。懇親宴御出席の方は三月十五日までに<br/>         久保田以兆句碑除幕<br/>         昭和五十四年三月四日（日）<br/>         滋賀県彦根市城町二丁目四一六<br/>         「田常寺」</p> | <p>お問合せは 彦根駅よりバス約十分<br/>         守口市豊秀町一十九<br/>         久保田以兆方 「川柳天守閣」<br/>         〒五七〇</p> |
|-----------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------|





▼かならず原稿用紙にペン書きで文字は楷書。締切毎月末着便まで。21行以内。十七字以内の句に、下三マスに雅号。

川柳高知

川竹 松風報

仏にも盛つて祝いの赤御飯  
祝宴の隅に小さく坐る母  
荒壁のまま新築の前祝い  
紅白の幕が祝いの家にする  
美しい寡婦へやきもきする他人  
他人には分らぬ夫婦の間風  
他人から見れば離婚も面白  
極道の果ては他人の世話になり  
口程でない父さんの玉の汗  
掃省孫一番風呂の客となり  
高々と音痴が歌う風呂の中  
恩人に奇しくも会うた岬の灯  
引揚げに病人負つてくれた人  
恩を売る親切だから遠慮する  
恩人を忘れる程に金をため  
お見事な嘘だと恩師知つてい  
風車少年の日は遠くなり  
文明の世にまだ残る渡し舟  
旅一つ終え長男が太く見え  
川柳たけはら

森井 菁居報

無気味さは妻の見ぬふり聞かぬふり  
床の軸替えてうれしい刻が過ぎ  
秋雨の面会謝絶まだ解けず  
やがて私も父親になる風の中  
ふるさとを秋の絵にする赤とんぼ  
散歩がてらという墓参もあるのなり  
積木積むごと母の愛父の夢  
白無垢を着れば素直になれそう  
拾う子のないドンダグリのひとりごと  
他人には不幸にみえる幸もあり  
おりづるのつるがとんでくゆめの中  
ひきずれば自分のものでない足よ  
黒い海働くひとの灯が動く  
明日からの野心誰にも話さない  
定年の近きに思うこと多し  
せき込んだ背へ優しい娘の手  
夕焼けにさからう如く葉がいとう  
傷だらけの器にもある利用価値  
忙中閑のひとつとき双児とひなたぼこ  
父さんのジャンパーちよっぴりはです  
ね小六愛

どんぐり川柳会

谷垣 史好報

静水 貞子 蘭幸 菁居 不柘 洋之祐 鈍舟 純子 寛子 小三のり 一路 節子 のばら 英詩 かつ子 忠彦 西合 笑子 小六愛 美幸 酔々 荒遊 鳶風 弥生 真砂 雅風 憲祐 小松園 吐来

つきあいをせざる専ら金を貯め  
寄せ書のなぜか真ん中だけはあけ  
猫の髭抜いて結論考える  
吊あげる座はまん中へ堅く敷く  
雲はゆうゆう結論あせらない  
つき合つてどうやと仲人さぐり入れ  
真ん中で鬼が一匹あぐらかき  
どたん場で刀を抜けば錆びていた  
いずも川柳会 板垣

城北川柳会

弘生報 満津子 道子 草丘報 軒太楼 華村 正朗 登美也 早苗 夢醉 栄雲 立雲 きみえ 寿美子 草丘 草虎 独仙 多賀子 耕草 泉人 文子 代仕男 緑之助 弘生報 満津子 道子





しりもちをついて安定考える  
安定はなし風紋がまた変わり  
安定したくらしの情性つきまとう  
良心のかけらへ罪が重くなる  
社会鍋せめても愛のかけら  
再婚へ愛のかけらを継ぎ合わせ  
年頃の息子へきれいな客があり  
客が来て採めた余韻が丸くなる  
先客があつて本心切り出せず  
ABのランクをつける得意先  
うちへ来る客だと犬が知っていた  
散歩道風は無心でかけ抜ける  
いつもの犬といつもの人に逢う散歩  
落ちぶれてカミソリ靴の泥落とす  
窓ぎわの男もカミソリだったその昔  
川柳大阪 児島与呂志報

度々 酔一 雀踊 好一 喜風 智子 久子 小松園 千梢 凡九郎 文秋 あいき 頂留子 佳加志 道子 秀峰 洛生 弘志 希久志 眉水 三十四 敏 胡蝶 喜醉 真佐 本蔭 雅果 比呂志

夢ひと抱いて職場の灯に生きる  
背伸びしてつかんで消えた夢ひとつ  
膨らんで膨らんで夢貯めている  
オモチヤ箱ちらけて子らは夢つくる  
オーエスケール川柳会 大坂 形水報  
ブルドガーうなると一ツ出来る街  
新入杜街の灯りには慣れて  
飛び入りの発案社運盛り返し  
商店街裏へ回ればごみの山  
飛び入りが主役を務めた披露宴  
街並も四季に応じて衣替え  
岡山の手前で今朝も霧に  
飛び入りに幹事そばにはじいてる  
飛び入りを横目からみ酒  
北壁の霧に無念がこだまする  
飛び入りの軍歌直立して唄い  
踊り子がくるくる回る目が回る  
飛び入りのハダシ優勝かつさらい  
飛び入りにうまいのがきて座が白け  
霧吹きのは虹はすかに笑つてた  
動くものみな亀になつて泳ぐ街  
酔いどれがくらげになつて泳ぐ街  
霧の中屋台の湯気が匂うてくる  
詩のない霧にぬれて来た左遷  
飛び入りの音痴へ音痴手をたたき  
順番を変えねばならぬ花輪来る  
川柳わかやま 津田 与史報  
光る瞳が心の隅の嘘を射る  
七癖に合わせるルールを妻が知る  
どこからか貧亡神の初笑い  
底辺を見た日羊は向を変え

天重 笑風 与呂志 博泉 洋々 榮坊 幸岡 中野 一川 秀子 亜也 野念 亜成 前田 千夢 度多 聖地 形水 弥生 入仙 好郎 幸博 正博 緑楼 寿子

金沢伸子・神田福子・来住タカ子

—還暦祝賀—

川柳六甲の会15周年記念川柳大会

日時 昭和54年3月4日9時30分開場

場所 神戸市立六甲勤労市民センター大ホール(国鉄六甲駅下車南側快速停車エレベーターあり)

兼題 「鐘」△倉 敷 △田中 好啓選

「琴」△川 柳 嵩 △西尾 榮選

「笛」△新 京 都 △北川 純一朗選

「鼓」△東 京 △小谷 源氏選

「鈴」△時の川柳 △三条 東洋樹選

「音」△ふあうすと △去来川 巨城選

席題 「当日発表」△六甲△ 金沢伸子謝選

投句 拝辞。各題二句吐、締切 12時

賞 費 五〇〇円 軽食 発表誌呈。

賞 総合点 一位二万円 二位一万円

三位五千元。十五位迄 豪華賞品

及び各題三才に短冊、色紙呈。

アトラクション 仕舞・歌謡曲・日舞・

琴。

10周年の節は御支援有り難く厚く御礼

申し上げます。15周年も万障くり合せ

て御来駕賜ります様御願ひ申し上げます。

主催 川柳六甲の会  
後援 ふあうすと川柳社

いぶし銀そんな光の父が好き  
 ルールを破るとても楽しい隙がある  
 友情のルールに言いわけなど要らぬ  
 ガム貰うてルールを曲げる草野球  
 いくつかのルール犯して成功者  
 二人だけのルールに二人類を染め  
 ライバルに逢う日の靴を光らせる  
 光るもの消えて久しい母の指  
 憎い程やりくりうまい妻光る  
 ゆきづまるルールはカラカラ音たて  
 陽の光る方へずいれいく手内職  
 また今年僕のミスから初笑い  
 負うた子がルール違反を許さない  
 ルールすれすれすい世を泳ぐ  
 一筋の光も花は逃がさない  
 さまよえる羊に神は気が付かず  
 川柳後楽合同句会  
 井上柳五郎報

としよ 太茂津 千寿子 天彦 武雄 三男 和子 英子 公子 登記夫 凡九郎 弘生 光代 善太 誠一 芳明 昌吾 鼓山 たけ志 玉恵 佐加恵 元一 葵丘 清路 桂風 秋月 登志男 哲郎 久米雄

ローカルの汽笛は山をかけのぼり  
 伸びきれぬ宿命を抱くローカル線  
 一両が行ったり来たりローカル線  
 ローカル線昨日の話が往復し  
 愛の血が押す手に通う車椅子  
 酔つてと愛の告白茶化される  
 愛を編む膝に転がる毛糸玉  
 七回忌亡妻に手向ける愛の花  
 愛されて今日鹿島立つ菊日和  
 同窓会ピエロの仮面ぬき捨てる  
 アイドルも所帯じみてる同窓会  
 同窓会禿と白とが較べあい  
 同窓会悪大將も好々爺  
 心から最後に笑うとき独り  
 傷ついた心をいやす母のひざ  
 奮起一番心のポイント切り換える  
 城北川柳会(前同分) 川口 弘生報

鮫虎狼 恒洋 ひろし 博友 宏郎 柳五郎 胡風 定平 梁太 照路 草風 幽谷 廉一 正彦 夏道 正彦 鬼遊 道子 満津子 弘生 玉子 右近 喜代子 秀村 人美 きくみ 喜洗 ますえ 炬齊

創立らくも  
三十周年  
記念川柳大会

時・54年4月8日(日) 前十時開場・開  
会12・30

所・里熊亭(木次町里方一畑バス営業所  
前横入る)

柳話 川柳塔副主幹(大阪)  
西尾 栞先生  
兼題 各題2句  
「春」 (大阪) 正本 水客氏  
「耐」 (大阪) 橘高 薫風氏  
「夜」 (大阪) 菊沢小松園氏  
「職」 (出雲) 尼 緑之助氏  
「顔」 (松江) 津川 紫吻氏  
「紅」 (松江) 多納 巷雨氏  
「祝」 (鳥取) 小西 雄々氏

席題・当日三題  
賞・秀句・選者短冊・副賞・総合賞  
会費・二千元(会費、昼食・写真・小宴)

欠席投句・4月5日迄・切手封入  
(会員三百円・会員外四百円)  
投句先 島根県木次町 大塚 勇宛  
又は本会宛

◎開会5時30分・汽車の方は木次駅より  
車で送迎します。

(関西方面窓口・岳人)

恒洋 鮫虎狼 ひろし 博友 宏郎 柳五郎 胡風 定平 梁太 照路 草風 幽谷 廉一 正彦 夏道 正彦 鬼遊 道子 満津子 弘生 玉子 右近 喜代子 秀村 人美 きくみ 喜洗 ますえ 炬齊



開幕の第一線は固くなり  
南座で京の師走の幕が開き  
開幕のベル鳴る頃に孫が飽き  
引出しで日の丸の旗欠伸する  
恩人へ欠かさぬ盆暮の贈り物

駒つなぎ句会 里

逆境に忍えた笑顔に運が来る  
あとは運今さわやかな汗を拭く  
良心を売れとお金の音がする  
誘惑に勝って淋しきだけ残り  
渾水のダムに盃投げ捨てよ  
宿敵へ返えす盃にかけている  
古傷に触れる盃なら持たぬ  
出土品謎解く鍵をかくし持つ  
謎の人解かずマスコミトップ記事  
誘惑へ小さい旅が待っている  
盛装へ一寸自分を離れてみ  
盛装で出たのに夜まで帰えない  
ふと触れた胸から誘惑したくなり  
裏社交知らず好運だと言われ  
運不運笑いとばして今日を生く  
誘惑もないまま青春消えそう  
誘惑もされず淋しい一人者  
盃に言えぬ一言沈ませる  
ライバルになるやも知れん盃か  
盛装へはめる指輪は別に持ち  
盃頂戴と仲居相当荒れている  
易の灯にかざして迷うことばかり  
紙一重前と後に砲弾が裂け  
南海電鉄川柳部(大阪市)辻  
音がしたと空港の出口で一まわり

星斗  
一休  
ハルエ  
テルミ  
三十四  
小路報

規不風  
一二三  
雀踊子  
小松園  
醉々  
岳人  
桐下  
綾女  
多津緒  
宏子  
凡九郎  
柳伸  
千代風  
雅三  
美乙女  
柳宏子  
石捨  
美代  
恒明  
勝美  
誓二  
育園  
善信  
圭水報  
摩天郎

離縁状持つて空港へ馳けつくる  
サングラス今日も空港の待ち合わせ  
空港で嫌というほど調べられ  
思わぬ空港へ降りるとハイジャック  
ハネムーン祝う空港日本晴れ  
横文字が読めず空港で聞き歩き  
ホノルでレイ掛けられてキスをされ  
民主主義空港一つにエゴの渦  
ハイジャックそれでも空港こんでいる  
飛行機嫌い夜景を見せに孫を連れ  
成田空港まだ醒めやらぬ過去をもち  
うやむやにさせない金の使い途  
うやむやの割勘幹事払われ  
官公庁資料ばかり山積し

和歌山七面句会 中筋

逢った日の思いそのまま日記帳  
カラフルな家建ちならび丘は消え  
綴織りの手提袋に母恩び  
サーピスにくれた袋で買われる  
丘越えて親子遍路の笠がゆく  
丘に立つ一本松の名は消えず  
丘の家白くて幸せそうに見え  
別れは昨日の如き戦友と逢う  
黒船を望んだ丘の水仙花  
内緒話をじつと聞いている簞袋  
私立高丘の上なるデラックス  
逢うために粧いし身で受話器とる  
美しい逢瀬へ海を持つ女  
冬簞袋忍袋の切れたまま  
白足袋や女の業のすてがたし  
楽園の丘と称した分譲地

小松園  
柳信  
圭水  
与一

宏子  
雅風  
綾女  
勝美  
千乃子  
川狂子  
正和  
清女  
朝子  
宣子  
晶子  
秀市  
光次  
光治  
フク子  
淳子  
晃子  
わか  
幸子  
富子  
寿子  
周穂  
知也  
三幸

虹川柳倶楽部(唐津市) 新潟回天子報  
鼻欠けの官女もあつて興を添え  
大漁を迎える浜へ走り走る  
働いた汗が笑顔を生んでいく  
同右にして置くけ寄付の奉賀帳  
折れた矢は継げぬ兄弟仲違い  
自転車独居老人湯具を持ち  
万象静寂陽光斜に木の間漏る  
猫思考する緑生や陽の光り  
初日の出山と雲とをかきわけて  
留守まもる女は強く土に生き  
脚線美思わせ振りのブーツ履き  
ゼロ歳から一人前まで母の汗  
めくりたいめくりたくないカレンダー  
うまいとは言えず新嫁たく難煮

三井ケ丘川柳会 高田

母親を喪くした女は欺けぬ  
風船を手にした孫に手をひかれ  
国鉄を悪者にして運刻する  
ピノキオの糸をつけてる男ども  
街灯に我が家のトイレ世話になり  
総裁の超スローボールで始球式  
球団の人を無視した江川狂  
進化した猫が小骨を立てている  
ささくれた心をいやす妻の声  
立ち話し列車の長さだけ途切れ  
まなかに生まれた冷遇されている  
わけありそうな女が柱の蔭で喫う  
飼犬にされてクサリに合う動き  
勝つために滅多に背中見せられぬ  
手の届くところに落ちてた鼻薬

五木  
ひろ坊  
実光  
勝一  
よしみ  
久仁於  
水谷  
南竿  
烟中  
堀治  
虹汀  
回天子

博泉報  
弘生  
三郎  
光夫  
一念  
好子  
明子  
勇三郎  
よしひろ  
てまり  
鬼遊  
惠美子  
小路  
小泉  
博泉  
眉水  
度

雪国を通った姿で来る列車  
日本人らしい鼻骨にあまんじ  
てのひらのこんな軽い父の骨  
干大根の影に達者な母の声  
この駅は通過列車会釈などしない  
女梅う洗えば落ちるものならず  
肥満体骨まで愛しても言えず  
羨慕も思慕も我執も終列車  
讚美歌へ北橋の赤さ赤過ぎず

### 西宮北口句会

朝山千世子報

義理だけは果してそつと宴を抜け  
良心にそむき世間を泳ぐ日も  
忘れたい事があるのかコップ酒  
度忘れと決して言わぬ父の眉  
虹かかる湖面しぐれて増す旅情  
健忘症海の時間は引き潮だ  
寡婦凍る運命の道今日もゆく  
銀ばんに一箇みかんが光つて  
ブーツ蹴る女の戦さ其処にある  
くされ縁忘れさせない年賀状  
千羽鶴より一羽の鶴の祈りよし  
紅白を見い見みかんはかがい  
直木賞もらつてみかん箱捨てる  
湯豆腐と夫の帰宅を待つ師走

### 京都塔の会

松川

石投げてみたくなる程池静か  
ごみ袋いっぱい秋の色を詰め  
矮鶏走る村で小川の水をほめ  
裸木でみの虫一つ風にゆれ  
陽だまりの塀へ落葉が寄つて来る  
消火器と云う気安さにされる僕

新之助 正面子 和歌子 三千子 凡九郎 小松園 あいき 静歩 薫風 美代子 婦美子 喜久甫 笑女 千世子 伊升 総甫 正祐 めぐる 政甫 薫風 静馬 寿馬 八州 杜の報 紫香 芳子 和友 美穂 求芽 飛鳥

合槌に老いの佗しさはぐされる  
定年が近く合槌多くなる  
あいづちを打つて妓が味方する  
清算をして小羊に利をまわし  
過去を清算平凡な幸つかむ  
何を清算したのか尼僧の白い影  
散り際を紅葉も一寸考える  
十二支に猫を入れた猫が好き  
十二月飲む相談がすぐ決まり  
雪空へスパー傘を並らべ換え  
十二神将夜の深さに胸を張る  
東大阪川柳同好会  
一言を忘れず胸に叩きこみ  
持ち味がその尽切うふかし芋  
持ち味がそのまま芸に生きている  
時代越え父の意見にある真理  
種蒔いて子孫潤す山が夢  
火種まだ炎えたきつて作業服  
持ち味を世代に添うているのれん  
図星指されるまでにあつさりカブト脱ぐ  
図星指されてさえのふたが開きかかる  
エンゼルの矢が貫いていた図星  
政治家の図星を刺しては漫画  
つなぎ合はすとモチーフが生きてくる  
怯えてた図星に刺る冷い矢  
来年も生きるつもり種袋  
骨董屋何しろ時代のものでして  
近頃の雀米よりパンが好き  
おふくろの胸の深さへ泣きにくる

佳丹子 弘三 潮花 笛珠 三求 万的 杜的 耕三 白溪子 誠史 水客 勝美 鶴声 三十四 柳宏子 綾子 喜彦 鎮彦 かず 度 あいき 湖風 万的 文舟 孤秋 くに子 川狂子 正義 慶之 雀踊子

### うみなり川柳会

中森葉士人報

大掃除夫婦喧嘩の種が出る  
そして朝飯面の紐を結んでる  
俺振った女心が謎となり  
へそくりも妻に見付かる大掃除  
朝帰る夫への言葉考える  
そして朝男は妻子のことにふれ  
邪念みな捨てたい暮れの大掃除  
長い冬耐えた小さな芽の息吹き  
大掃除思わぬ写真に皆を呼び  
そして朝産声しみじみ聞いている  
謎やととけたと思う朝のくつ  
新しいセリフが言える朝だった  
子に送るモチと師走の風に立つ  
里帰り提げた残りを送らせる  
かけられた謎とは知らず本音はく  
戦争に迫り立てられた回り道  
長い目で見てます晩成疑がわす  
サイレンに泥棒指紋を置き忘れ  
謎解けぬまに今宵のコップ酒  
無駄な日を送るおもいでいる無職  
川柳化粧箱 植村客遊子報

善堂 帆雀 盛桜 佳女 笑王 富美湖 天涯 華宏 舟生 熊生 葉士人 保子 無人 とし江 豊々 洋生 貞山 由多香 日満 岳詩 秋月 実水 奮男 越山 紅月 葉香 永楽 客遊子



# ・募 集・

## 五月号発表(3月15日締切)

川柳塔(10句)若本多久志選  
水煙抄(10句)川村好郎選  
愛染帖(3句)橘高薫風選  
課題吟(各題5句以内)

「新緑」大峠可動選  
「男の子」保西岳詩選  
「飾る」島居百酒選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

## 六月号発表(4月15日締切)

川柳塔(10句)若本多久志選  
水煙抄(10句)川村好郎選  
愛染帖(3句)橘高薫風選  
課題吟(各題5句以内)

「低気圧」岡田拳法選  
「食中毒」岩田ひさお選  
「手直し」田中笑風選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。  
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

常任理事会は3月5日 5時から

常任理事会の開催日変更!

定価 四百円(送料29円)  
半年分 二千五百円(送料共)  
一年分 四千八百円(送料共)  
昭和五十四年二月二十五日印刷  
昭和五十四年三月一日発行

大阪市南区鰻谷中之町〇番通

編集兼 中島蓬太郎  
発行人 藤原童心社  
印刷所 郵便番号 542

大阪市南区鰻谷中之町〇番地

発行所 川柳塔社

電話 大阪・二七一三九八五番  
振替口座 大阪・三三三六八番

# 本社三月句会

日時 三月七日(水) 午後六時  
会場 金属会館

南区鰻谷東之町10番地  
地下鉄堺筋線長堀橋下車東スグ  
電話 271・3935番

兼題

「幼女」  
「内緒」  
「厄日」

高杉鬼遊選  
野村太茂津選  
笠原吸江選  
川村好郎選

各題三句以内厳守

席題 二題 当日発表  
会費 三百円

☆投句だけの方は切手百円封入

★電話での投句や訂正はご遠慮願います  
大阪市南区鰻谷中之町20

川柳塔社

4月の兼題

「一年生」  
「立ち食い」  
「花便り」  
「区切り」

常任理事会・4月は5日 5時から  
" 5月は4日 "

ヤングのための  
カジュアルウェア  
Kurabo Fabrics  
クラブウ カジュアルウェア  
倉敷紡績株式会社



・ペンペン草・

★次号から、同人吟は若木多志氏、水煙抄は山村好郎氏になる。また一年間、ご苦勞をねがうことになるのだが、西尾葉氏と正木水客氏には一年間のご苦勞を感謝申しあげる。読みにくい文字、または淡いエンビツ書きなど、ご苦勞が多かったこととおもう。

句集・地下鉄

★児島与呂志さんの「地下鉄」は、着々と進行して

# カッケ 肉体疲労時の ビタミンB<sub>1</sub>補給に アリナミンA

☆筋肉痛・肩こり・腰痛・神経痛の緩和にも  
☆アリナミンA25ミリ錠のほかに5ミリ錠



る。憶面もなく「谷町」や

「千亀利」同様、一任され

と違っにかかったが、ぼく

▼葉子コーナー

▼「春は処女、夏は母、秋は未亡人、冬は継母」という西洋の諺がありま

す。私の通勤の田舎道も花木のツボミが恥しそ

に眠らんできました。▼心斎橋の花屋さんの店先にフリージア、きんせんか、菜の花、ボケと花

の競演で、疲れて帰る時など、心をなごませてく

れます。▼漱石はボケの花を愛し「来世に生まれ変わるときボケになりたい」といわ

念乗車券などをカットに入

れて、この人でないと生ま

れぬ句集になることとお

遅配の功罪

★郵便物の遅配のおかげで一月はヒマが出来、邦

寛美の新喜劇から洋画、邦画、寄席（いずれも招待券

で無料）を見る好機に恵ぐ

ました。

★中の娘の子（小学二年）が宿題を忘れて、先生から叱

た。★朝日座の文楽は「菅原伝授手習鑑」の通し狂言だっ

女史に行っていた。その夜の部だが、まず一驚

したのは、若い人の多かつたことである。どうやら女

子大らしいお嬢さんが大半だった。よく見ると床本に

赤のボールペンが走っている。覚えてやろうという、

その意欲がうれしかった。★古いといわれる川柳も、

そう察したものでない。★意を強くしたことである。

★三菱銀行の銃銃魔事件は映画のギャングもの以上の

残酷さで、あんな兇悪なヤツがわねわれの隣りにいる

ゾッとする。さいわいぼく

は銀行にはご縁がないので銀行ギャングにやられる心

配はないが、よく秋田先生が生前いわれていたことに

「無茶をする人間は猛獣よりこわい」と。

★このごろの映画やテレビに刑事ものがふえたようだが、わねわれも何か、そ

う「オレが主役になってやう」という小型の梅川昭美

がまだまだそここにいる。かまわらない。怖い世

の中になったものだ。

（不田二三夫）



たのしさひろがるお買物

**阪急**

「川柳塔」同人

島居利次(百酒)著

# 『白い歯』

宣戦布告後、最先鋒隊としてフィリピン、ル

ソン島北部に敵前上陸、各地を転戦し、ミン

ダナオ島で終戦を迎え、レイテ島に於て俘虜

生活を送り、昭和二十一年暮、復員するまで

の体験を記録した著作。

発行日 昭和五十四年三月一日予定

発行所 構造社出版株式会社

(各地書店にて販売) 定価 一、五〇〇円

南紀 和歌山 四国でのお泊りは――

## 南海電鉄サービスチェーン

### 《ホテル・旅館》

白浜温泉――忘れえぬ はまゆりの宿

政府登録国際観光ホテル ホテルパシフィック

政府登録国際観光旅館 朝日

勝浦温泉――海に浮かぶパラダイス

政府登録国際観光旅館 中の島

湯峰温泉――山のいで湯で山菜料理

政府登録国際観光旅館 湯の峯荘

和歌山・新和歌浦――海岸美が楽しめる

政府登録国際観光旅館 萬波

徳島・鳴門――うずしおの宿

政府登録国際観光旅館 鳴門

政府登録国際観光旅館 鳴門公園ホテル

紀北・橋本――ゴルフの宿で季節料理

観光旅館 紀の川苑

大阪・泉南淡輪――魚つりに ゴルフに

観光旅館 淡の輪苑

大阪・なんば――清楚で近代的なホテル

ホテル南海

お問合せ・お申込み ■ 南海国際旅行・日本交通公社  
 サービスチェーン大阪案内所

☎06-631-0222



南海電鉄